

静岡文化芸術大学

SUAC 多文化プロジェクト シンポジウム

文化をつなぐ橋づくり —学生による実践の試み—

報告書

日時：2013年10月12日（土）9:30～12:00

場所：静岡文化芸術大学 南278大講義室

主催：静岡文化芸術大学

編集

池上重弘

2014年2月

この講演会は、2013年度静岡文化芸術大学イベント・シンポジウム開催費「お芝居出前プロジェクト 寄せ書き展示」及び「はままつ多文化共生 MONTH 事業」の一部として行われました。

目次

SUAC 多文化プロジェクト シンポジウム

文化をつなぐ橋づくりー学生による実践の試みー

目次	・・・	i
1 はじめに	・・・	ii
2 シンポジウムの記録		
プロジェクトとシンポジウムの趣旨説明	・・・	1
1) まりまりのお芝居を介した交流支援		
A 日本・ブラジルお芝居出前プロジェクト	・・・	3
B ポンチプロジェクト	・・・	7
2) 子どもたちへの異文化理解を目的とした交流支援	・・・	10
3) 多文化交流センターでの外国人中学生学習支援	・・・	13
4) ブラジル人学校と連携した日本語学習支援	・・・	16
質疑応答	・・・	21
3 資料		
A 趣旨説明の図	・・・	28
B 当日配布資料	・・・	30
C 写真	・・・	40
D チラシ	・・・	45
E 関連新聞記事	・・・	46

はじめに

池上重弘（静岡文化芸術大学教授）

この冊子は2013年10月12日（土）に静岡文化芸術大学で開催されたシンポジウム「文化をつなぐ橋づくりー学生による実践の試みー」の全貌を記録したものである。このシンポジウムは、2013年度静岡文化芸術大学イベント・シンポジウム開催費「お芝居出前プロジェクト寄せ書き展示」及び「はままつ多文化共生MONTH事業」の一部として開催されたわけだが、これら2つの事業と本講演会の関係について、ここでは簡単に記したい。

2011年度と2012年度の2年間にまたがって、静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター長特別研究として「多文化共生社会の実現に向けた交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究」（研究代表者：池上重弘）を実施した。この研究の目的は、静岡県における重要な地域課題のひとつであり、なおかつグローバル化時代のこれからの日本社会にとって重要な課題となる多文化共生を取り上げ、本学の独自性を活かした実践的活動を通して、多文化共生社会実現に向けた交流支援と学習支援のあり方を探ることである。学生が関わる地域貢献活動を展開し、その成果を検証することにより、多文化共生の先進地である浜松から大学が主導する支援活動のモデル事業として全国に発信することを目的とした。

今回のシンポジウムは、交流支援と学習支援の実践的活動のリーダーを務めた学生たちが自分たちのプロジェクトの成果と課題を発表するとともに、地域の関係者からプロジェクトに対する評価をいただき、質疑応答を通じて議論を深める機会であった。

静岡文化芸術大学では、2013年10月11日から20日にかけて、日本・ブラジル両国で実施したお芝居出前プロジェクトの来場者が書いた寄せ書きを本学西ギャラリーで展示する「お芝居出前プロジェクト寄せ書き展示」を開催した。日伯の市民レベルの相互理解を深めるために行ったこの展示イベントに合わせて2つの関連イベントを企画した。ひとつは展示会の会期初日にニッケイ新聞（ブラジルの邦字紙）の深沢正雪編集長を招いて行った特別講演会（10月11日）であり、もうひとつが2年間の特別研究の成果を総括するこのシンポジウム（10月12日）であった。

浜松市では2013年に「多文化共生都市ビジョン」を策定し、エスニックな多様性を都市の活力として生かす方向性を提示した。その流れの中で10月を多文化共生MONTHと定め、多文化共生関連のイベントを集中的に開催し、広報の一元化等により、多文化共生の意識啓発の促進を図った。本学でも上記の展示会と特別講演会、そしてシンポジウムの3つを「SUAC多文化プロジェクト」の名の下にまとめて「はままつ多文化MONTH事業」に申請した。以上がこのシンポジウムの位置づけである。地域の関係者としてシンポジウムに参加し、学生たちの活動に対して貴重なコメントをくださった方々にこの場を借りて深く感謝したい。

シンポジウムの記録

池上

私はこのプロジェクトの監修者の静岡文化芸術大学国際文化学科教授の池上です。

このシンポジウムは、基本的に学生たちがこの2年間進めてきた多文化共生を目指した市民との連携のプロジェクトについてその活動の成果を報告し、今後の課題を検討する機会です。

静岡文化芸術大学では文化・芸術センター長特別研究として「多文化共生社会の実現に向けた交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究」を2年度にまたがって実施しました。その研究成果を総括するシンポジウムとしてこれを行います。交流支援と学習支援の直接的な担い手となった学生たちや指導教員が活動の成果を報告し、本学以外の関係者から評価やコメントをいただきます。そして今後の地域貢献のあり方について展望するのが今日のシンポジウムの目的です。まず第1部の趣旨説明ということで、このプロジェクト及びシンポジウムの趣旨を簡単に説明します。

【プロジェクトとシンポジウムの趣旨】

静岡文化芸術大学は西暦2000年に開学しました。もう13年目になります。開学当初から多文化共生の研究を継続してきました。各種の報告書・シンポジウム・フォーラムでその成果を地域に還元しているわけです。2011年・2012年度の2年にわたって文化芸術研究センター長特別研究という枠で以下の研究をしました。

私どもの大学は静岡県が設置する公立大学になったとき、中期計画を作りました。向こう5～6年どのようなところに重点的に力を入れていこうかという中期計画です。その中で本学としては3つの研究領域を重点目標研究領域（重点的な領域）として決めました。そのひとつがユニバーサルデザイン。本学はデザイン学部があります。2つ目がアートマネジメント。芸術文化学科がそうですね。3つ目が多文化共生を含む文化政策ということで、その中でも多文化共生が特出しになっているところに特徴があります。ユニバーサルデザイン・アートマネジメント・多文化共生の3つに重点的に力を入れていこうということになりました。その一環として「多文化共生社会の実現に向けた交流支援と学習支援のあり方を巡る実践的研究」を行いました。これは私と日本語担当の広瀬、2人の教員で行いました。実は本学にはブラジル人の教員がいます。イシカワエウニセですが彼女は今産休でお休みしているものですから、残念ながらイシカワエウニセはこの2年間のプロジェクトには直接は関わっていません。

このプロジェクトは、本学の独自性を活かし学生関与の実践活動を展開するというものです。本学の学生たちはとてもアクティブで、大学が街中にあるということで、これまでもさまざまな形で地域との関わる活動を展開してきました。多文化共生の学習支援などもそうです。今回はより方向性を明確にして学生たちの活動を組織しました。この1～2年の大きな変化として、本学に日系ブラジル人の学生たちが数多く入ってきたことが挙げられます。最初にブラジルの学生が入ってきたのは2006年度でした。2008年度にデザイン学部に入学したのですが、その後2年ほど途絶えました。ところが今の3年生に2人、今の2年生に4人、1年生に4人というように、現在はブラジル籍の学生が10名在籍しています。こういう当事者の第2世代が本学の学生になって、その活動が少し実質的な転換をとげました。当事者の視点が活かされる、あるいはポルトガル語を使ったプロジェクトが学生たちの手で行われる、といったことで

す。たとえばこのシンポジウムと同時開催で昨日から始まっていますが、本学西ギャラリーでは『届け！お芝居デリバリーと私たちの思い』という展示プロジェクトをしています。このプロジェクトも日系ブラジル人の学生たちが実行委員会の中で重要な部分を占めていて、自分たちの手でこういったバイリンガルプロジェクトを進めるようになりました。こういう時代は5年前には考えられませんでした。そんな変化もあって、新たな地域のかかわりとのモデルをどう作っていこうと考えました。2年間のプロジェクトを通してその成果を検証する、今日はその機会ですが、大学が主導の支援活動のある種のモデルとして浜松という場所でどんなことができたとかを全国に発信していきたいと思います。

今日の発表は大きく分けると交流支援と学習支援の2つがあります。交流支援にはまりまりプロジェクト、多文化共生ワークショップの2つを柱にしました。まりまりプロジェクトは『お芝居デリバリーまりまり』という東京ベースの俳優集団と大学がコラボレーションして、まりまりのお芝居をつなぐ力、場をつなぐ力を多文化共生の現場に生かそうという企画です。まりまりのお芝居は文化的な背景や言葉の違いを超えて普段接することのない人たちをつなげる力、あるいは普段接しているけど関係がうまくできてない人たちをつなげる力があります。まりまりの持つこの力に注目して、大学と連携しながら地域の交流を深めようというプロジェクトです。

これはさらに2つのパートがあります。ひとつ目は日本からまりまりのお芝居をブラジルにデリバリーする。そして日本とブラジルをつなごうというプロジェクトです。私も去年、そしてそれに先立って一昨年、まりまりと一緒にブラジルを訪問しました。2011年度には約10日間一緒にブラジルを回ってきました。その成果が今開催している西ギャラリーの展示ですが、つなぐというのはどうやってつなぐのか、これはお芝居を見た人が書いてくれた寄せ書きー日本から持っていった寄せ書きと、ブラジルから持ってきた寄せ書きーを浜松で見てもらうプロジェクトです。2つ目は中学校区単位で公立学校と外国人学校、そして地域が連携するプロジェクトで、浜松市東区の長上地区で与進中学校と外国人学校EASをつないでいこう、それを地域の公民館（現協働センター）につないでいこうという企画です。地域の中の外国人学校であって外国人学校の子達も地域の一員だというつながりを作っていきたいと考えました。

多文化ワークショップというのは浜松市内の小学校で1~2回のワークショップを行うというものです。このワークの内容は学生たちが考えて、外国人の子どもの多い学校ともう1校ー一年度によって場所は違いますがーの2校を会場にしてワークショップを行っています。

学習支援については3番のところに、磐田プロジェクトと書いてあります。磐田市の多文化交流センター、外国人集住型の団地のすぐそばにあります。そこで始まっていた外国人中学生向けの学習支援、高校進学を軸とした学習支援に本学の学生たちがお手伝いさせていただくプロジェクトです。その後浜松市内の中学校でも類似の学習支援が始まっています。

4番目は日本語学習支援。これは本学の正式なカリキュラムの中に日本語教員養成課程が組み込まれていて、その養成課程を取っている学生中心に外国人学校EASと連携しながら進めていくプロジェクトです。これもおそらく全国で類を見ない面白いプロジェクトなので、今日楽しみにしていただければと思います。この4つのプロジェクトのそれぞれについて本年度までの成果と、それを踏まえての今後の課題と展望を本日はみなさんと共有していきたいと思えます。

【1 まりまりのお芝居を介した交流支援 A 日本・ブラジルお芝居出前プロジェクト】

池上 続いて、研究成果発表としてプロジェクト監修者の立場から私がお話します。

ではプロジェクトの概略から説明します。お芝居を介した交流支援プロジェクトの目的は大きく3つあります。ひとつ目は浜松での交流支援。2つ目は日本とブラジルの交流支援。3つ目がブラジルでの交流支援。この3つがプロジェクトの大きな柱です。

1番目。浜松での交流支援は、中学校区の公立学校と外国人学校をつなぐ、公立学校と外国人学校、公民館をつなぐということです。具体的に言うと浜松市の東区に長上地区というのがあります。そこにある与進中学校は外国人の子どもたちの数でいうと市内で4番目なので結構多いですが、これまであまり支援が手厚くなされてきたと言える場所ではありませんでした。そのすぐそばにEASブラジル人学校があります。両校はごく近くにあるのになかなか交流ができない。かつて浜松国際交流協会の職員が少し連携のきっかけを作っていたという話を聞いて、何とか大学としてお手伝いをできないかと考えました。それに先立ってEASとは日本語の学習支援で前から本学とつながりができていましたので、何とかうまくつなげないかという気はありました。学校間のつながりだけでなく地域に見える形になるのがとても大事だと思いました。幸いこのプロジェクトが走り始めたころ長上公民館の館長（現協働センター所長）が交替しました。この時着任された山本館長は前の職が浜松の外国人の学習支援センターの所長、さらにその前は浜松の国際課の職員。さらにその前は市からの出向で本学に来てた方でした。ですからうちの大学のことはよく分かっているし、多文化共生のこともよく分かっているらしい。そんな方が地域の公民館の館長になったことで、これは何かの巡り合せだと感じました。

2つ目。日本とブラジルの交流支援です。まりまりのお芝居を見た人たちが日本でもブラジルでもお芝居を見た後に寄せ書きを書きます。それを交換する。つまり日本からの寄せ書きを持って行きましたし、ブラジルからも寄せ書きを持ち帰っています。それを今展示しています。

3つ目のブラジルでの交流支援はサンパウロ州の町、ピラル・ド・スールという農業の町では、そこの日本語学校とその地域の公立学校をつなぐ交流支援のプロジェクトを行いました。またブラジル日系人社会の高齢者と子どもたちをつなぐ活動も行いました。

ではお芝居デリバリーまりまりとは何かというところをお話しして参ります。これは2005年設立の俳優と音楽家の集団で、普段劇場に来ない、あるいは来たことのない人たちに向けてお芝居しています。8人のメンバーがいますが、いつも8人が揃ってやるわけではありません。そのときのプロジェクトに、その趣旨に応じてメンバーが集まります。別のプロジェクトでは別のメンバーが集まるという形でプロジェクトを行っています。日本や海外の昔話をメドレーにしてつなぎ、短い演目を複数上演していくお芝居のスタイルです。黒い衣装を着ていまして、小道具も大道具も何も使いません。要は声帯模写とパントマイムが合わさったような、いささかコミカルでありながら非常によく計算された演劇表現を行っています。黒い衣装だけで演じるのですが、見ているとその黒衣の姿がお姫様に見えたり、おじいさんに見えたりするといったような、人の想像力を掻き立ててくれるお芝居です。また、まりまりの芝居はポータブルです。畳一枚あればできる手軽さがあります。このお芝居と出会って彼らが持つ潜在的な力に魅力を感じました。このお芝居でいろんな人たちをつないでいけるのではないかと考えました。

彼らは海外での公演経験も抱負で、イギリス、ドイツ、フランス、メキシコ、ウクライナでも公演しています。ブラジルでもやろうじゃないかと誘ったところ、そのうち二人が面白そう

だと乗ってきました。まず2010年度に浜松の路上演劇祭が旧松菱の囲いを取って街中の目立つ場所で開催されました。この時は大学としても路上演劇祭にかかわっており、私はその路上演劇先に出演したまりまりに出会ってこれは面白いと思ったわけです。その年の路上演劇祭の翌日、本学で「路上で演じること」の意味を考えるシンポジウムを行いました。そのシンポジウムの折にまりまりがここのステージに登壇して『大きなかぶ』をデモンストレーションでやってくれました。それが非常に面白い。コミカルでありつつ最後はかぶを皆で抜くというしかけで、参加者と舞台が一体になる双方交流型のお芝居なんですね。これにガツンとやられました。

その年（2010年）、トライアルとして多文化共生・実験教室を行いました。本学でワークショップをしたり、外国人児童の多い遠州浜小学校（当時）あるいはムンドデアレグリア校という南米人の学校でトライアルを行いました。どんな反応だろうと私たちは当初は半信半疑でしたが、外国人の子どもたちが強い関心を示してくれて勇気を受けました。メディアにも注目をいただいて、NHKや中日新聞などが取材してくれました。

翌2011年度に浜松の企業経営者らで作る日伯交流協会の理事会と例会でまりまりが上演し、在浜松のブラジル総領事館の総領事も見て下さいました。是非これは子どもたちのために役立ってほしいということで、ブラジル総領事館からのバックアップも得たわけです。この年度も本学で学生向けのワークショップとお芝居会を行いました。また夏にはブラジルでプレ公演ということで10日間ほど行って来たわけです。浜松市内の長上地区での活動も2011年度から始まりました。日伯交流協会と静岡文化芸術大学が協働でまりまりをブラジルに送りました。協働してというのは、日伯交流協会は企業経営者の集まりなので、まりまりをブラジルに送るに際してかなり資金援助をしてくれたのです。日伯交流協会のメンバーの中には日系ブラジル人もいるので、そのメンバーがブラジル側の受け入れ機関にアプローチするサポートをしてくれました。

なぜ大学がこういうことをやるんだろうかとの疑問があるかもしれません。なぜ大学がお芝居のプロデュースをするかという疑問です。まず私どもの大学は浜松にある公立大学として地域貢献をしていく使命を持っています。学生たちの力を生かした活動ということで、お芝居するのはまりまりですが、そのお手伝いをしたり、今プチまりと言って、まりまりのフォーマットを借りて学生たちもお芝居を始めています。

浜松での交流支援については、与進中学校の校区で外国人学校も含めた地域のつながりを作りたいと考えました。これは公民館で活動する団体が、地域の学校・子どもたちを巡るこんなつながりがありますよと示してくれた図です。実は今言ったこの中に外国人学校EASというのはないんです。物理的にはその校区内にEASの校舎があってそのことを知っているのだけれども、具体的なネットワークの中に入っていない。そこでEASも地域の一員で、子どもたちのつながりの中がいいと考えたわけです。ところがそういうつながりを無理やり作っても難しいので、お芝居デリバリーまりまりがうまくそれを仲介するきっかけを作れないかと思ったのがこのプロジェクトです。

最初は与進中の英語部（当時）で上演しました。実はこのとき、まりまりは中学生向けには初めての上演でした。小学生や大人向けの上演経験はあるものの、「中学生は思春期だし、もしかして白けちゃうかな」と心配でしたが大成功でした。特に『100万回生きたねこ』、みな

さんをご存知ですね、『100万回生きたねこ』のお芝居は中学生の胸にもダイレクトに響いたようです。中学生たちはこれに積極的に反応してくれました。長上公民館でもこういう子どもたちを対象とした公演を行いました。そのときは中学生のボランティアもお手伝いしてくれたりしました。

昨年度 2012 年度に長上地区での活動が本格化しました。本学の学生も参加してこの後説明のあるポンチプロジェクトが行われました。ブラジルの本公演は 4 週間ありました。多くの寄せ書きを持ち帰りました。展示に向けた準備も始まりました。この辺りから当時の 1 年生（今の 2 年生）ですがブラジル人の学生たちも非常に頑張るようになりました。ブラジルの本公演ではニッケイ新聞の全面的なサポートをいただいて 38 回、計 1,500 人を超えるお客様に見ていただきました。日系人がいる場所、ブラジル人が多い場所、両者の交わる場所などでお芝居を上演しました。これがニッケイ新聞からとった日本語の記事とポルトガル語の記事です。こんな感じです。これは深沢さんが書いてくれた記事です。

最後に成果と課題について見ていきましょう。まずまりまりのお芝居を見た人たちの感想の絵、寄せ書き、感想文、音声のコメント、映像のコメントなどをいただきました。ブラジルでの公演時には日本の観客が書いた寄せ書きも持って行きました。向こうからは 15 枚の寄せ書きをいただきました。このように、お芝居デリバリーまりまりが日本でもらった寄せ書きを持ってブラジルに行く、ブラジルで書いてもらったものを日本に持ち帰ってくるという、伝書鳩のようにメッセージを運ぶ役割を果たしたプロジェクトなのです。これは寄せ書きの具体例です。82 歳の移民の 1 世の方が書いて下さった寄せ書きで、「まりまりのお芝居を見て自分たちの文化のことを改めて考えた、日本人なんだけど日本にいる日本人と私たちとは違うんじゃないか」ということをコメントしてくださったりしています。こういう貴重な触れ合いの場を作ることができました。劇場に足を運ぶことのないブラジルの一般市民、あるいは子どもが日本文化を知るきっかけになりました。日本の人たちにとってはブラジルからの寄せ書きを見るということで、ブラジルや日系人コミュニティに対する理解が深まる機会になっていくと思います。

最後に課題と展望です。寄せ書きの多くは「まりまりは素晴らしい」「まりまりは楽しかった」とまりまりのお芝居の評価に終始することが多く、相手国の人に対するメッセージを書いてほしいという本来の私たちの意図とは必ずしも一致していません。相手国の人に向けたコメントもあるのですが少数でした。ブラジル公演は多額の費用がかかるので、なかなか今後毎年というわけにゆきません。ひとたぶ公演に行くとブラジルでは「また来年来て、また来て」とおっしゃってくださるのですが、どうやって継続するかが難しいです。何とかこの 2 年間のプロジェクトをまとめて形にして公表したいと思っているところであります。

以上が私からのプロジェクトの説明です。この部分に関してブラジル側でこのプロジェクトを見てくれたニッケイ新聞編集長の深沢正雪さんにコメントをお願いします。

【コメント】

深沢 ブラジルから来たニッケイ新聞、カタカナのニッケイ新聞で日本経済新聞とは関係ありませんが、ブラジルで出ている公称 1 万部の日本語のコミュニティペーパーです。

それでもりまりのお芝居を現地でサポートさせていただき、見せていただいた感想を述べさせていただきます。最初に浜松とブラジルでメッセージをやり取りする伝書鳩のような役割をさせたいということを言われたとき、ふと昔取材で聞いた話を思い出しました。2003年に藤永リンコンさんという、浜松でジャドラという教会をされていた方にお聞きしたのですが、1998年の頃までは、浜松市長はブラジルの大使、一国を代表する大使が行っても3分くらいしか会ってくれなかった。その中で1998年に当時の名古屋総領事のフレータスという方がいらっしゃって彼と当時、野村丈吾（ノムラ ジョウゴ）ブラジル連邦下院議員（日系の連邦下院議員）が一緒に行って「まずはその辺の人達をいっぱい受け入れてくれてありがとう」というところから始まって、日系社会の事情をとうとうと説明されたそうです。そのとき初めてそのときの市長が35分間話を聞いてくれたと。それから日系ブラジル人に対する市長の対応も変わってきたという話を聞きました。そのとき市長は自分はそういう話を知らなかったということ強調されていたということを野村丈吾下院議員からお聞きしました。やはり知らないということはいろんな誤解や先入観を呼びやすいな、というのをその話から聞いて思いました。

まりまりの方たちが伝書鳩のように浜松からメッセージを持ってきていただいて日本の方に見ていただいたと言うのは非常に意味があると感じました。まりまりの皆さんの芝居がすばらしいと思ったのは、ポルトガル語で芝居をやってくれた点です。ポルトガル語を耳にされた方も多いと思いますが、非常に抑揚に富んで、リズムカルで歌ってるようなきれいな言葉です。それぞれの言語にはそれぞれ特徴があります。普通にしゃべっているのに、普通のブラジル人は手を振り、まあ足は振りませんがパントマイムのようにしゃべっています。ですから日常生活がそのまま演劇みたいな部分があってテレビニュースのアナウンサーもすごいです。その辺の感覚が違うというか、まりまりの表現はまさにブラジル人にマッチした、受け入れられやすい表現だったと思い、ああいう表現方法でブラジル人に接するというのはいいやり方だと思いました。

僕はブラジルで4年ほど前に肺の病気をしまして、サンパウロの公立病院に肺の検査をしに行きましたが、病院の検査技師が、肺活量の検査のときに、口に肺活量の検査の機械を入れてコンピューターでつないでスーハースーハーとやらせるわけです。それが検査技師と一緒にやってくれます。「はい、吸って吸って吸って、吐いて吐いて吐いて」とこういう感じで技師が目の前で一緒にやります。こっちも釣られてやってしまって、こっちは1回やるだけなのでいいんですが、技師は1日中それをやっているわけです。これはすごいと思って、ほとんど演劇のような世界です。ただの病院なんです。まりまりの皆さんがやってお芝居は向こうに行くと特異な感じではなくむしろ普通感覚というか、受け入れやすいのではないかな。そんな感じがしました。

しかも中身が日本の昔話だとか、向こうの人には非常に新鮮です。ヨーロッパの民話なんかも入っていましたし、あの辺なんかはまさにポルトガル語でもやってくれるということで取付きやすくて、そういうメッセージを運んでくれるという意味でよかったと思います。メッセージを運ぶときは伝え方が大事だと思います。同じことを言うにしても言い方によって相手の受け止め方が違う。そのときにまりまりがブラジルと相性のいいやり方でやってくれたと思います。

池上 今の話の中で言及された、領事と長い時間話してくださった市長さん、北脇さんがいらっしゃいます。北脇さんが市長のときに浜松市立高校にインターナショナルクラスを作りました。そこで学んだ子どもたちの中にうちの大学に入ってくる学生が出始めています。次のプレゼンターはそうした日系ブラジル人学生の一人、宮城ユキミさんです。

【1 まりまりのお芝居を介した交流支援 B ポンチプロジェクト】

宮城 私は日系ブラジル人です。浜松市立高等学校のインターナショナルクラスを出て2年前にこの大学に入学しました。これからお話しするのは、添付資料の5,6ページなんですけどもポンチプロジェクトについての説明です。

まりまりさんのプロジェクトの延長線にあって、学生だけでまりまりさんが持ってきて下さった寄せ書きやそれらの記録を学生がどう生かせるか、を考えてポンチプロジェクトを作りました。ポンチという聞きなれない言葉だと思いますが、ポルトガル語で橋という意味があります。日本とブラジルに限らず架け橋になることを目標に活動したいとこの名前を付けました。主な目的は、お芝居デリバリーまりまり、ブラジルツアーで集まった寄せ書きや写真、絵などを日本に伝えることが目的です。これは2012年にブラジルからの寄せ書きです。2012年にHICEで実際に学生が日本に寄せ書きを伝えるために展示しました。

目的の二つ目は、お芝居を通して長上地区の与進中学校とエスコラ・アレグリア・デ・サベル、EAS（ブラジル人学校）の交流を、学生がお手伝いして支援していこう、ということ。これが2012年度の与進中にて発表したものです。ポンチプロジェクトのコンセプトは『つなげる・広がる・世界が変わる』という3つの言葉を柱にして活動しています。『つなげる』としては、まりまりが運んでくれた寄せ書きをポンチプロジェクトが紹介したりしています。去年、浜松市多文化共生センター（HICE）というところで初めて展示しました。

実際にお芝居として動き出したのは去年の7月で、浜松市立与進中学校とEASブラジル人学校、まりまりの皆さんとSUAC（静岡文化芸術大学）の学生でワークショップを通して交流しました。初めはアイスブレイクとして冒頭にまりまりの演技を見てもらって雰囲気や和ませる目的でやりました。その後自分の名前を紹介してポーズを決める。言葉の要らないワークショップで二つの交流をしました。二つ目の写真、左の二人がSUACの学生で真ん中の3人がEASブラジル人学校の学生、1番右が与進中学校の学生で皆輪になって名前とポーズを決めて言葉の要らない交流、ワークショップをやりました。

2012年11月に長上公民館祭があってまりまりと共に、オープニングとエンディングで与進中、EAS、SUACが舞台に立つことになり、この日リハーサルで初めて3つの団体が集まってやりました。リハーサル会場はEASブラジル人学校です。初めて与進中の生徒がEASブラジル人学校に行って、演技とか踊りの練習をしました。次の日に長上公民館祭があって、誰が誰か分からない状態でした。学生もいて与進中の生徒もいて、まりまりもいてブラジル人学校の生徒がいて同じ舞台に立ちました。リハーサルから地域の方が「ブラジルの子なの？」と、私がカメラを撮っていると話しかけてくれて「はい、そうです」と言ったら「こういう風に活動しているのね」と一言いただいて地域コミュニティにもアピールできたのではないかと思います。

今年に入って子ども講座が長上公民館で行われて、1 枠 20 分ほど山本館長から何か言っていただけませんかと言われてポンチプロジェクトで初めてワークショップをすることになりました。お正月がテーマで、せっかくなのでブラジルの遊びをやりたいと思っていましたが、ブラジルで正月の遊びが日本のようにないと言うか、私たちが考えられるのがなかったのでブラジルでよく行われる Rabo de Burro (ハボデブロ：牛のしっぽ) という遊びをしました。牛みたいな絵を貼って、目隠しをして尻尾を正しい位置に貼れるかどうか。周りの声で「もっと右、左、上、下」。その言葉をポルトガル語にして、子どもたちに先に「右はジレイタ」「左はエスケルダ」と教えて皆で「ジレイタ ジレイタ」と叫んで盛り上がっていました。

1 月からまりまりが浜松に来られなくなってしまいました。まりまりの拠点は東京なので浜松まで来る費用がかかるので来られなくなり、自分たちでお芝居をすることになりました。最初にお芝居をやりたいと言ったのは与進中学校の、一緒に活動してきた国際交流部の皆さんです。まりまりがいなくても私たちがやると言ってくれて、そこから多言語芝居に挑戦してくれました。中学生の様子を見て、大学生もお芝居をやろうと集まりポンチプロジェクトが始まりました。まりまりのスタイルを取り入れた「ぷちまり」と言う団体が結成されました。これが実際にお芝居をしてくれた与進中国際交流部の皆さんです。このとき正月だったので「明けましておめでとうございます」を中国語、タガログ語、英語、ポルトガル語でやってくれました。ぷちまりが 4 人のメンバー、黒い衣装を着てたみ 1 畳分のスタイルで、小道具を使わずに声、体の表現だけで結成されました。

1 月をきっかけに本格的にお芝居の稽古が始まって、与進中の国際交流部の活動も活性化しました。ぷちまりの結成に当たって、財団法人浜信地域振興財団と浜松国際交流協会 (HICE) から助成金をいただきました。助成金は講師としてまりまりを浜松に呼び、大学生にこういう風にお芝居するんだと教えていただきました。

ポンチプロジェクトの課題は、ある地域に特化してしまったことです。1 年半ちょっとの活動を通して長上地区が主な交流地域になってしまったことが課題でした。もっと広く行きたいのが私の思いです。お芝居の限界もあって地域に特化してしまったことで毎回毎回お芝居するというふうになり、お芝居だけでなく踊りもあるんじゃないかとか、別のものもあるのではないかというふうに色々な声もいただいていますし、これもお芝居の限界を感じてしまいました。

与進中と E A S という学校機関との連携・協働の難しさがあって、こちら (与進中) は国際交流の部活動として交流していますが、E A S は有志で集まったメンバーで、放課後に一緒にやろうと言っても E A S の放課後と与進中の放課後の時間がずれたり、E A S だと帰りのバスがあり、そのバスの時間までに合わせなければいけないということがありました。また学校ということもあり、映像を撮ってインターネットに流すと肖像権や個人の権利があって、保護者に許可を取らなければいけないということで学校・教育機関はいろいろ課題があります。

まりまりを講師として東京からお呼びしていますが、お芝居の稽古も含めて学生のみで実行していくのが私の目標です。学生が主体で中学生に教えたり地域の皆さんを巻き込んで学生のみで実行していくのが本来の姿だと思います。

【コメント】

池上 ありがとうございます。本当は今日コメントをいただくはずだった長上協働センターの山本所長は所用により欠席となりました。そのかわり、以下のようなメッセージが届けてくださいました。

「池上先生とは文芸大で勤務していたとき大変お世話になりましたが、今回また勤務先の長上でお世話になるとは思いませんでした。縁とは本当に不思議なものと感じます。さて昨年度池上先生のご尽力で長上公民館、現在長上協働センターに改名、の公民館祭でのまりまり、文芸大の学生さん、与進中の生徒さん、EASの生徒さんによる演劇、子ども講座での文芸大の学生さん、与進中の生徒さんによる外国語での劇やゲームを行っていただきました。子ども講座では長上地区社会福祉協議会さんの協力もありました。特に祭の間での演劇は素晴らしいものでした。ありがとうございます。長上地区ではブラジル人、フィリピン人が住んでいます、自治会の人、ゴミの出し方など生活の中でコミュニケーションを取ることに苦労しています。またEASの学校もありますが、学校があることが地域の人にも分かっていますが具体的な交流はないようです。こんな中、長上公民館での講座にまりまりや学生の皆さんにご参加いただいたことはこれからの多文化共生に貢献するものと考えます。多文化への理解はすぐにできるものでなく、交流を少しずつ進めるしかないと思いますし、違う文化や考え、生活様式はなかなかすぐに馴染むものではないと思います。長上協働センターでは多文化共生実行委員会による外国人の子どもたちのための放課後教室が行われています。また本年度もぷちまりさん、長上地区社会福祉協議会の皆さんの協力で12月に子ども講座を開催する予定です。今後も長上協働センターとして多文化共生に協力していきたいと考えます。池上先生のますますのご活躍とぷちまりの皆様のご活躍をご祈念いたします。」

コメントは以上のようなものです。

私なりに少し補足します。長上地区でこのプロジェクトを展開させるにあたって、ものすごく慎重に、用意周到に準備を重ねました。いきなり行くと弾かれるなと思って、公民館で活動するに際して地区の自治会長を初め、いろいろな団体の代表の方に公民館の館長さんからお話していただき、何人かの方にはその後私たちが直接電話をかける形でー日本語で言う、仁義を切ると言うんでしょーかーご挨拶をしたわけなのです。

とてもうれしい誤算は地区の社会福祉協議会の皆さんがこのプロジェクトに強い関心を抱いてくれたことです。関心を持つのみならず正月のイベントでギターを弾いてくれたり、イベントの最後にご自身たちが七福神などの役で出てきてくれたり、地区の社会福祉協議会の皆さんもプロジェクトに関わってくれた。こういう新しい動きが長上地区で始まっています。私たちのプロジェクトではありませんが、時もほとんど同じくして浜松市の働きかけで多文化共生実行委員会が長上地区で学習支援の教室を始めている。これまで長上地区はほとんど支援が入ってなかったんですが、交流支援と学習支援の歯車が回り始めたというのを私はよい印象を持って受け止めています。

池上 続いて2の『子どもたちへの異文化理解を目的とした交流支援』ということで、新村さん、お願いします。

【2 子どもたちへの異文化理解を目的とした交流支援】

新村 多文化共生ワークショップ 2013 年度代表の国際文化学科 2 年の新村奏代です。多文化共生ワークショップの、今までの活動の成果や今後について発表します。

まず最初に多文化共生ワークショップとは何か、について話します。私たちは国際文化学科に所属していることもあって異文化に関心を持っている生徒が多く日ごろから異文化や多文化共生について考える機会も多くなっています。大学での学びを得て異文化をいろんな人にも知ってもらいたい、体感してもらいたいという思いもあって、自分たちでワークを考えて市内の小学校に赴いてワークショップを開いています。活動の目的は、世界にはさまざまな文化があることに気付いてもらって異文化理解をしてもらうこと。子どもたちに、異文化に興味を持ってもらって、興味を広げてもらうこと。異文化を知ることによって自分の日本の文化を見直すきっかけを作ってもらおうこと、という 3 つです。子どもたちに異文化に触れてもらうことで知らない世界を知ってもらって、浜松は外国の方が多いため外国人に目を向けてもらい、普段から多文化共生について考えてもらいたいと思っています。

多文化共生ワークショップができた経緯は、2011 年度の国際文化学科 4 年生の人たちが始めたプロジェクトです。毎年有志学生にバトンがつながって今年度は 3 年目のプロジェクトになりました。今年度は 1 年生から 4 年生まで合計 23 名で活動しています。

活動内容は、週 1 回のミーティングで情報共有をしています。ワークショップについて知らない人も多いため、去年から参加しているメンバーで校内のワークショップを開いています。そこでワークショップや、進行役とも言えるファシリテーターについて勉強したり、実際にワークショップを体験したりすることを目的でやっています。ワークショップを体験することでワークの計画もしやすくなっていると思います。

ワーク案の計画はプロジェクト内で小グループを作って、その班の人たちでワークを考えてもらっています。ワークの案が固まったところでプロジェクト内で 1 回ワークのリハーサルをしています。ここで 1 回やってみることで問題点などが分かたり当日スムーズに進行するための最終確認をします。それが終わると小学校でワークショップを実施します。例年市内の小学校や中学校 2 校を訪れていてそれぞれ 2 時間ずつ時間をいただいています。ワークショップが終わると学校に戻ってきてワークの振り返りをして次回のワークショップに向けた反省会をしています。今年度もその流れで進めてく予定で、今はワークの案を考えています。今年のテーマは「世界の学校生活」ということにしました。小学生や中学生が 1 番身近な集団生活の場である学校生活から、多文化共生や異文化について考えてもらいたいと思います。

今年度のワークについてはまだ固まっていませんので昨年度のワークの内容を具体的に紹介したいと思います。昨年度は主に 3 つに分けてワークを考えました。1 つ目が世界の歌についてです。日本でも耳にした事のある音楽の発祥国を当てるクイズをしました。これは日本の童謡にゆかりのある国について知ってもらって、そこから世界について知ってもらいたいな、という思いからこのワークを考えました。海外が発祥の曲については原曲だったり、その海外での歌詞や意味を紹介しました。2 つ目のテーマは世界の国歌についてです。世界のいくつかの国歌を聞いてもらって国名を当ててもらおうクイズをしました。国歌から各国のイメージを持ってもらったりしました。その国歌の歌詞説明もしたり、日本の君が代の説明をすることで日本との文化の違いなどについても考えてもらいました。3 つ目は世界の踊りについてです。海外

の踊りの映像を見てもらって、どこの地域の踊りか予想連想してもらおうクイズをしました。これは各地域ごとの踊りの違いや各民族の持つ音楽の世界観に気付いてもらうことが目的です。踊りの意味や背景を簡単に説明したことでその踊りの地域の文化についても知ってもらえたのでは、と思います。この今紹介した3つのワーク全てにおいて、自文化を見つめなおしてもらいたいと言うことで日本についても取り上げました。例えば浜松には浜松祭、ゴールデンウィークに行われる祭がありますが、そこで使う音楽なども取り上げました。

活動成果としては、ワークショップの最後に小学生たちに感想を書いてもらいましたが「楽しかった」「面白かった」という感想をたくさんもらいました。楽しんでもらうことが異文化を理解してプラスのイメージを持ってもらうことで理解の一步につながると思っています。子どもたちの持つステレオタイプをいい意味で覆すことができたと思います。例えば世界の踊りのワークは、あるカーニバルの演奏を流して「どこの国だと思う？」と聞いたら大体の子がブラジルと答えました。イギリスでもノッティングヒルカーニバルというのがあるのですが、ブラジルだと思っていたカーニバルがイギリスでも行われていることを知ってもらって、ステレオタイプを覆えせたと思っています。

学生の私たちも学ぶことが多かったプロジェクトだと思います。ワークをするに当たって私たちがまず理解できないとちゃんとしたワークを開くことができないので、たくさん勉強しました。学校現場を見るいい機会になったのでは、と思います。私もそうなのですが、教職課程を履修している生徒が私たちのプロジェクトに何人か来まして、その人たちにとって教える立場から見るということはよい経験になったと思います。

小学校の側から声をかけていただけるようになりました。今年度もやってほしいと言う声は私たちにもうれしいことですし、小学生にとって憧れの存在ともいえる大学生がワークをする意味や大切さを改めて考える機会になりました。

いい面もたくさんありましたが課題もありました。楽しかったという感想をいっぱいもらいましたが、楽しかったで終わらせないためにどうしたらいいか考えていきたいです。他の感想の中にも、他の文化についても調べてみたいと言う感想もいっぱいもらいましたが、そこがちゃんとつながっているかもまだ分からないのでそのことについて考えたいと思います。私たちは未熟なので先生のを借りずにスムーズな進行ができてない部分もあります。できるだけ自分たちの力だけでやっていきたいです。参加学生の規模の拡大についても検討しています。今年度や今までは国際文化学科の学生だけでやってきましたが、大学生にとっても学ぶことが多い活動なので他学科の生徒もやってみたら面白いのでは、と思います。

2013年度のワークショップは企画を考えている段階なのでここからが本格的な始動と言えます。よいところ、成果のところは引き継いでいって3つの課題についてはこれから考えながらどう解決するか考えていきたいです。今年度の活動の様子はブログやフェイスブックで発信してくので、『多文化共生ワークショップ』で調べていただくとサイトが出てくるのでご覧ください。

池上 多文化共生ワークショップに関するコメントで最初の年から2年、今年度も行われている南の星小学校の鍋田先生です。

【コメント】

鍋田 2011年、外国人集住地域の遠州浜小学校と、昔からの農村という感じの3世代がたくさん住んでいる地域の外国人が少ない五島小学校が統合して南の星小学校が誕生しました。遠州浜小や遠州浜地区は既に多文化状況が進んでいましたが、五島地区はそうではありませんでした。そんな二つの文化の違う学校が一緒になったのが2011年です。たまたまその年に池上先生よりご提案を受けました。そこで6年生を対象に多文化ワークショップを実施していただくことになりました。それ以降3年にわたって実施していただくことになっています。今年度は5・6年生を対象ということでお願いしています。ここに昨年度6年生の主任、そして今年度外国人担当を務める村松さんがいますので、そのときの子どもの様子などを話してもらいます。

村松 南の星小学校は全校児童500人に対し、外国の子どもは100人くらいいます。クラスに5~6、多いところは8人とかです。自分も去年30人くらいのクラスで5人外国の子がいたのですが、ひとつは当たり前になっているので特に外国の子だといってこだわって感じることはないです。逆に同じ友達として一緒に行動するとか仲良くすることができますが、そこは日本の学校なので同じルールの中で過ごすということで、異文化理解ということはどうかということ、逆にあまり理解できないというか、同じ日本文化をやってくれよ、というところもあったと思います。

その中で去年ワークショップをやっていただいて子どもたちが1番感じたのは「やっぱり外国って違うんだな」というのではないかと思います。特に踊りが英語でそれを音楽で、それを結びつけるということだったので理屈じゃなくて心に感じるもので、外国って何となく違うな、国によってかなり違うな、というのを日本の子どもが感じてくれた。外国の子も自分の国のことは家に帰ると母語で話したりして分かっている、日本のことも分かっているけど他の国のことは知らない。だから「なんだ。なんだか自分の知らない世界だ」ということを感じてくれて、終わった後のしばらくはそういう話題で休み時間なんかも過ごしていることがあったので、とても子どもたちにはいい体験になったと思います。

鍋田 というように大変私たちにとってプラスがありました。多文化共生を考える大学生たちが自分たちのために来て活動してくれることは、子どもたちにとっても意義があります。子どもたちは「大きくなったらこうなりたい」というお手本のイメージを与えてくれています。地域も学校もすでに多文化になっているという認識がありますが、お互いの文化を深く理解し尊重しあうことは努力が必要だと思います。努力の入り口を作ってくれる活動として多文化共生ワークショップを高く評価します。今年度も予定しているのでお願いします。

池上 多文化共生ワークショップは、3年前の私のゼミの学生が「先生、こういうことをやりたいです」と言ってきました。面白いけれど学校とコラボレーションするには大変なこともあると言いつつゴーサインを出したところ、二人の学生がそれを形にして、後輩達、仲間たちを集めて組織を作りました。

その翌年は主に活動した学生たちを私が何人か呼んで「今年もやるか」「やりたい」「じゃあ、あなたたちの中で代表を決めて」と私は3分くらい席を外して戻ってきたらある学生が「私がやります」と言って代表になりました。新村さんの代は私はそれすらしなかった。「皆さんやりたい気持ちある？じゃあ集まって代表を決めてごらんよ」という具合でした。私が何人か呼ぶんじゃなくて学生たちで集まって学生たちで代表を決めるという風に、いい意味で私の手から離れてって、学生たちの自立的な活動になっていきました。南の星小学校からもご理解をいただいて、今年度は小学校のほうから「やってほしい」と言うことで依頼を受けました。これはうれしいことでした。ある先輩が考えて私たちからお願いして実施したことが、少しずつ学生たちの自立的な活動として根付き、学校からも評価されてきたということです。課題もいくつか挙がりましたが、浜松の大学と浜松の小学校の連携プロジェクトとして発展させていきたいと思います。

池上 次は学習支援です。学習支援は二つのプロジェクトがありますが、ひとつは磐田プロジェクトの丹羽さんです。磐田市の多文化交流センターで行われた学習支援の活動に学生も関わっています。先ほどの多文化共生ワークショップも日系ブラジル人の学生が関わっているし、こちらの活動にも日系ブラジル人の本学の学生が関わっています。

【3 多文化交流センターでの外国人中学生学習支援】

丹羽 国際文化学科2年の丹羽です。私も活動に参加している磐田プロジェクトについて紹介します。このプロジェクトは、外国人と外国にルーツを持つ生徒への学習支援をしていて、目的は児童の高校進学です。活動内容から紹介します。まず磐田のプロジェクトです。活動時間は毎週水曜日と金曜日の19時から20時の1時間です。場所は磐田市の東新町にある多文化交流センターで行っています。主に外国にルーツを持つ中学生・高校生を対象にしている現在約20人が登録しています。1回の支援で12~3人ほどの子どもが来て1時間勉強しています。支援では学生と本学の学生が1人か2人いて、後はセンターの職員と一緒に子どもたちに教えています。

このプロジェクトは三者の連携で成り立っています。地域・行政・大学です。地域というのは磐田市に住む中学生、高校生、センターの方々、子どもたちの保護者の方々です。行政というのは磐田市ですが、このプロジェクトはだいたい磐田市役所の方々に助けていただいています。磐田駅からセンターまでタクシーで行っていますが、その交通費の援助とか、夏休みに小学生の学習支援みたいなことも行っていて、これも磐田市の要請です。後は私たち、本学の学生です。この三者がうまく連携して磐田プロジェクトが成り立っています。

次に2年ほど前から始まった浜松の学習支援を紹介します。活動時間は毎週月曜日の15時から16時までの放課後の1時間です。場所は浜松の南部中学校（駅南）です。対象はもちろん南部中の生徒です。テスト期間が近づくと延長したりもしまして、私も去年1時間延長して2時間くらい一緒に勉強しました。どんな感じで学生が参加しているかを紹介します。今年1年生は3人入ってきました。2年生4人の内、1人は留学中なので3人で活動しています。3年生1人と4年生1人の合計9人で全員国際文化学科の学生です。実際の支援の仕方を紹介します。

磐田は受験が近づいてきたので受験生の子達は違う部屋でセンターの方が指導していて私たちは関わっていません。センターの方は退職した元教員がいらっしゃって受験生指導をしています。元教員の方は理系の先生が多いので文系科目を教えるのが難しいと言うことで、文系科目が得意な私たちが行っています。最近では国語、英語、社会に限らず数学、理科、全科目ほぼ教えていて、そんなに難しくはないので教科書を見ながら一緒に考えていくという感じで勉強しています。他の元教員ではないセンターの職員は今中学1、2年生の子を指導していただいています。私たち学生は主に高校生と中学1、2年生の指導をしています。写真は右が受験生で左は中学1、2年生と高校生たちが勉強しています。真ん中の扉を仕切りに大きい1つの部屋を2つに分けています。

次に浜松の方を紹介します。現在中学生が3~4人いて自分たちで問題集を持参して、学校の宿題ですがその問題集を一緒にやっています。テスト前になると例えばテスト対策で私たち学生が問題を作って中学生に説いてもらう、ということもしました。たまに学生が問題集を用意します。

年1回イベントを行ってまして、磐田市の中学生、高校生と浜松の中学生が交流できるように、あと私たち大学生が交流できるように、夏と冬にイベントをしました。今年もしました。宝探しゲームの写真です。宝を見つけた後、封筒から何か紙を取り出している写真です。これが封筒が隠されていたところですが、消火器の横に茶色の四角い何かが見えますが宝探しに使っていた道具です。これは夏休みということでお菓子作りでかき氷を作りました。毎回イベントのときに皆で、本格的な調理実習でなく軽くトッピングする程度でできるようなお菓子作りとかをします。ここにかき氷器を持ってきて、氷を削って上にアイスに乗せたり牛乳かけたりいろんなトッピングをしました。去年のクリスマスイベントを紹介します。これは百人一首とカルタ大会をして、大きく写っているのが百人一首です。大学生と高校生だけなのですが、古典のいい勉強になったのではないかと思います。他の中学生はカルタをして盛り上がりました。これはビンゴ大会です。ビンゴカードを持っている方が見えると思いますが、お菓子を食べながらまして中学生、高校生にはビンゴすると景品がもらえる感じでしました。今回もお菓子作りしてパフェを作りました。コップの中にコーンクレープや砕いたクッキー、生クリーム、アイスやフルーツなどを入れて自分で好きなものを入れるパフェです。

1年の流れも紹介します。春は新メンバーの勧誘です。池上先生の文化人類学という1年生の必修科目があって、今年もプレゼンで募集をかけたなら3人入ってくれて、がんばってくれています。

小学生支援ですが磐田市の公民館で行っていて、小学生が夏休みの宿題をしてきてそれを見てあげたりとか、残り時間を一緒に遊んだりしました。今年も学生が行きました。先ほど紹介したサマーイベントのレクリエーションで生徒と学生が交流できました。下の進路、学習相談ですが、これは去年が初の試みでやってみまして盛り上がりました。紙に匿名で自分の悩みを書いてそれを回収してみんなの前で読み上げて、たとえば勉強がうまくできないとか勉強が難しいけどどうすればいいかなというのを皆で話し合っ、大学生がこうすればいいよとアドバイスしたりしました。センター、磐田市、学生との意見交換も交流センターで行いました。

次に今までの成果についてです。まず高校進学への支援ができたことです。去年も高校受験の子が一人いましたが、第1志望の高校に合格して現在もその高校へ通っています。あとは浜

松市、磐田市に住む中高生の交流です。これは年2回行イベントでできました。初対面の子もいて溶け込めるかなと思いましたが、磐田市の高校生が前回の夏休みのイベントで気にかけてくれて、さすが高校生だと感じました。大学生の身近なモデルとして学習者へのアドバイスです。現在プロジェクトで2年生の中に日系ブラジル人の学生が2名いますが、その子達がいいモデルになってくれるかなと思います。そして先ほど紹介した地域、行政、大学との交流ができているということです。

課題がたくさんあります。高校受験だけでなく大学受験の子も一人いますが、大学進学への支援もしていかなければと思います。あとは個人へ焦点を当てた支援ということです。この子は何が得意か、何ができないか、どういう性格か、どこまで自分でできるか、どこからができないかをもう少し考えていかなければと思います。学習に集中できない生徒への指導です。今年度に入って中学1年の子がすごく増えて、人数も増えたこともあって仲のいい子同士の席がくっついてしまうと最近騒がしいのでどう対処するかも考え中です。

そして課題への対策です。学習だけでなく大学の情報を提供してみたことです。漠然と大学はこういうところだとか、文芸大ならこういう勉強しているところがいいよとか、奨学金のこともアドバイスできればと思います。後は学生間で生徒の情報を共有するという事です。今週水曜日のミーティングで、この子とこの子は近い席にいるとしゃべってしまうからなるべく離そうとか、しゃべっている子がいたら注意しようと言う感じです。何が得意なのか、数学のこの分野ができてないからこれを中心に見てやってほしいということもミーティングで他のメンバーに伝えました。後は気になった生徒には学生がそばに付くことです。そうすると中学生の集中力がかなり変わりました。私も先週金曜日に磐田に行ってきましたが、隣同士でしゃべっている子がいて、私じゃない学生がしゃべっている子のそばで1時間、地理を勉強したみたいですけど、そばにいただけでしゃべらず1時間集中できたので私たちメンバーも学ぶことがあるかなと思います。現在メンバーは私を含めて教職課程をとっているメンバーが3人いて、教えるいい練習になるかと思えます。課題はたくさんありますが、これからも継続的な支援をして、皆の学力を高めていければと思います。

池上 磐田市多文化交流センターで活動している会の代表の木ノ内先生です。

【コメント】

木ノ内 磐田市多文化交流センターから来た木ノ内です。丹羽さんの発表を聞いて「そうだそうだ」と頷いていました。課題について、課題の対策についての確に捉えているということで、来ていただいてうれしいなと改めてここで感じています。ありがとうございます。

センターが2004年4月にスタートしました。そのとき池上先生とゼミの学生かと思えますが何人かでよくセンターに来てくれていました。今思い出すと、センターは県営の集会所を借りてスタートしたものですから学習するような場所ではありませんでした。暑い夏に外に出て木陰に蓐蔭を敷いて子どもたちと先生、学生さんと笑ったことを昨日のように思い出されます。それが2004年、それから10年経ちました。その中で当初から学生さんは子どもたちに人気でした。特に女兒はお姉さんのように慕って、学生が来てくださるのを楽しみにしていました。10年が経過して当初の学生が未だに私たちのセンターに顔を出してくれています。ありがた

いです。思い出すと4年生の学生が個人的にボランティアで週に何回も来てくれていたのを思い出します。

時の流れと共に社会の状況、子どもたちを取り巻く環境など大きく変化しました。その中で高校進学とか小学生が中学生に移行する難しさが生じました。そんな2008年から中学生支援が本格的にスタートしました。そこで学生たちからいろんなご支援をいただいて、学生から「こんな方法はどう」と幾度となく提案してくれました。スタッフと学生とミーティングしました。中学生が意欲的に学習できるように共通理解を図ったように思います。中学校の生徒さんが支援の中で「そうだったんだ。分かった」という声を聞くと、私たちが大きな励みになると聞いています。ありがとうございます。

支援の中で磐田市は、磐田プロジェクトへの感謝の思いから、少々だと思いますが予算的に努力してくれていることに私たちセンターの者も感謝しています。大学に招かれて交流会に参加させていただきました。子どもたちにとって1番身近な存在の学生に対する憧れなどでとても喜んで参加させていただいたり、来ていただくことにありがたく思います。今後もこのプロジェクトを続けていただけたらうれしいです。今、一人の学生が高校へ進学したというお話がありました。2008年からトータル6人の外国籍の子達が高校進学をしました。その子の一人の高校生で、今3年生です。ずっと中学から通っていて今もセンターに通っています。この男子生徒がこの大学、文化芸術大学へ進学希望していると聞いています。まずは一生懸命勉強をということで勉強しているようです。彼に続くような子どもたちがセンターから生まれていってくれたらうれしいです。今後も多文化センターにご支援いただけたらと思います。ありがとうございました。

池上 誤解のないように申し上げますと、多文化交流センターは外国の子どものためだけの施設ではありません。日本人の小学生の支援もしているし、中学生も外国の友達に連れられて日本人も来ている。先端的な状況として本学の日系ブラジル人の学生が日本人の中学生に勉強を教えている場面もあります。そういう意味では、近未来を先取りした空間かなと感じています。

【4 ブラジル人学校と連携した日本語学習支援】

日本語支援プロジェクトでこちらから日本語教員養成課程を履修している3人の学生、戸塚真友子さん、桑原紘子さん、諏訪かおりさんの発表です。そして本学の日本語教員養成課程の立ち上げに尽力し、その課程の運営を中心的に引き受けている本学教員の広瀬英史、この4名の発表です。

戸塚 2012年・2013年の日本語教育実習の一つであるEAS実習についての活動報告をします。私からは2012年度の活動報告をします。

まず、「目標と目的」です。EAS児童・生徒を対象とした日本語教育実習では、EASの児童・生徒に日本語を学んでもらうことはもちろん、文化を学んでもらうことを意識しています。日本の文化とブラジルの文化、両国の理解を念頭に置いています。日本語を楽しんで学ぶ、

また、アクティブな活動を通して学ぶ、そして積極的な会話ができる環境づくり、大学生と一緒に楽しめる空間を実現させることを意識しています。

つづいて、2012年の実践授業の一部の概要を話させていただきます。この年のEASの学習者は中学2年～3年の4名の生徒でした。日本語能力はN2～N4のレベルでした。

1つ目に紹介する授業は、「学内周遊ゲーム」です。大学の各施設をまわり、大学の各場所で学生が待機しており、EASの生徒達がそこで日本語の課題をクリアしていきます。例えば、①このお金で買えるものを買ってください、②写真を見てその写真に合う形容詞で教えてください、③カードを組み合わせて漢字を作ってください、などです。年度始めの授業だったので日本人学生と親睦を深めることと、レベル差を意識し、学内を探検する楽しみの中に日本語教育を取り込みました。

(以下、VTRを流しながら説明)

2つ目に紹介する授業は、これは大学の情報検索室で「将来の夢」をテーマにパワーポイントの作成をし、翌週にプロジェクターを使って発表しました。

以下3点をまとめてもらいました。

- ①その職業に興味を持った理由
- ②どんなことをしてみたいのか
- ③その職業についての具体的な説明をする

最後に、私たち学生達が質問し、生徒達はそれに答えていきました。大学だからこそできることということで、パソコンでパワーポイントを作成してもらいました。パワーポイントを使うのは生徒たちにとって初めてだったし、新しいことに挑戦する楽しみもあったと思います。教室の前に立って一人で自分の夢を、それも日本語で発表するのは、緊張する場面であったでしょうが、発表したことは生徒たちの自信にもつながったと思います。

3つ目に紹介する授業は、漢字を造字要素で分解していくことと、逆に、造字成分を組み合わせると何の漢字になるかを考えられる授業です。これによって、今までにはない新しい漢字学習を考えてもらいました。漢字に親しむこと、漢字に対する苦手意識を軽減することをねらいました。

4つ目に紹介する授業は、「クロスカルチャー」で、生活様式やある出来事が起こったときにどのような考え方をするのか、EASの生徒たちに、家族や友人からアンケートを取ってきてもらいました。この結果を日本人のそれと比べ、日本とブラジルの違いを比較するという授業です。VTRは表を作っているところです。緑がブラジル人で赤が日本人の結果です。統計を取る、数の書き方ですら、日本とブラジルでは異なります。日本では『正』で数を表しますが、ブラジルは四角と斜線を入れて5までの数を数えるために記入していきます。ここでも文化の違いを発見できました。他にも、「自分のことをきれいかどうか」という質問に対してブラジル人の解答は「全員そう思う」でしたが、日本人の解答は「そう思わない」でした。とても面白い結果で、私たち学生達にとっても勉強になる授業でした。2012年度はディスカッションで自分の意見が言えること、文化の違いや考え方の違いを発見できることを最終目標にしました。多文化共生を実現するためにブラジル人と日本人それぞれの考え方や文化に触れる機会は必要だと思います。お互い意見を言い合ってよりよい道を探るよい機会になると考えました。これが2012年の目標でした。

桑野 今年 2013 年度の日本語教育実習について報告します。対象生徒は小学 3 年から 4 年生です。日本語能力として N4 か N5 レベルで、2012 年度より低学年で児童が中心です。楽しみながらアクティブな活動を通して日本語を学ぶのが大きな目標です。対象年齢が下がったことで前年度より「楽しい」ということを重視した授業作りが私たちの目標です。「楽しいこと」が大前提で、学習者がどんなゲームをしたら「楽しいか」をまず先に考えていきます。次に、どんな日本語の内容・学習項目を盛り込めるかを考えていきます。ルール説明の仕方、事前準備というのは日本語教育をする上でとても工夫しているところです。

前期（2013 年 7 月まで）にどんな授業をやったかは配布資料で一覧にしてあります。この中からひとつ紹介します。「伝言ゲームによる日本語学習」を紹介します。これは日本語の短い文章を聞き取って速く正確に伝えるというゲームです。日本語の学習として、「聞くこと」と「話すこと」の学習を意識しました。学習者である児童達は、正確に伝えなければいけないので、「誰が」の「が」とか「どこに」の「に」といった助詞の使い方が遊びながら、自然な形で意識して聞けたり、使えたりすることができるようにしようというねらいをもった日本語活動です。児童達には前もって授業で名札を作り用意させているのですが、1 番速く、正確に伝えられたチームには、かわいいシールを与え、名札に貼るようにしました。これによって、児童達のモチベーションをあげるようにといて点は大きな工夫の一つです。実際に、児童達はもらったシールを名札に貯めていきが、とても喜んでおり、好評でした。

日本語で伝えるだけでなく、私たち大学生がポルトガル語で「伝言ゲーム」にチャレンジしてみるというのもやってみました。ポルトガル語をやったことない大学生が多く、外国語で言葉を伝えるのがどんなに大変かという、異文化理解の経験、相互理解にもなった経験でした。

諏訪 最後に日本語支援プロジェクトの報告として、実際に携わっている私がどのような体験をし、どのようなことを感じ、また、考える機会になっているかについてお話ししたいと思います。

ここまで、昨年 2012 年、今年 2013 年の活動内容を報告してまいりました。私たちは楽しみながら日本語を学ぶことを大きな理念とし、日本語教育を行ってきました。

私事になりますが、私はこの夏にブラジルの日本語学校を訪れました。そこでは日系 3 世や 4 世、混血、非日系の生徒も多く在籍していました。そうした生徒の多くは日本語がほぼ 0 の状態で入学してきます。しかし彼らの恵まれているところは親が教育に熱心なことと、家庭の中で日本語を聞く機会に恵まれているところです。常にこうした環境の中で育っていれば、日本語のみならず日本文化に対しても親しみが持て、溶け込みやすくなります。

他方、出稼ぎとして日本に渡った日系ブラジル人の家庭では、親がポルトガル語しか話せないケースが多く見られます。ブラジル人学校に通う生徒は日本語に触れる機会が少ないのです。だから、家でも学校でも日本語を使うことが少なく、日本に長く暮らしながら日本語が上手く話せない生徒が多くいるのが現状です。そうした環境の中にいるブラジルの児童・生徒が私たち大学生と日本語で交流することで、日本語を話すきっかけを持つことができるのも、日本語支援プロジェクトでこうしたブラジル人学校と大学との連携事業の利点ではないでしょうか。私たち自身も日本語学習を通じた交流から、ブラジル人の児童・生徒たちとよい信頼関係を築

くことができる機会に恵まれていることを、本当にうれしく思っています。生き生きとした表情で活動する児童・生徒たちの様子を見ることができると、私たちとして授業で達成感を味わうことができ、それが「卒業研究」「多文化支援」などの次のモチベーションへとつながっていきます。このように静岡文化芸術大学とEASとの交流活動は私たちに学びの機会を与えるだけでなく、日系ブラジルの児童・生徒が日本に溶け込むきっかけとしても効果があると言えます。一方通行の活動でなく、お互いに実りある活動が展開できていることが魅力だと私は感じております。

広瀬 本学教員の広瀬です。学生がここまでしっかり報告してくれるとは思っていませんでした。こうして成長していく学生を見るのは教員である我々にとっての幸せであります。この点でも日本語支援プロジェクト、静岡文化芸術大学とEASとの連携事業が実りのあるものであることが分かっていたかと思えます。

学生が行っている日本語の授業に関しましては、学生側の視点ではありましたが、聞いていただいたとおりで、詳細に報告されていたかと思えます。こちらからは日本語支援プロジェクトと、静岡文化芸術大学の日本語教員養成課程との重なりについてお話しします。日本語教員養成課程の中身や詳細に関しては只今学生から報告がありましたので、私からは、外枠と言いますか、枠組みについてお話しします。

日本語教員養成課程は2009年4月から本学で開設されました。実践部分である日本語教育実習は3年生と4年生が行います。つまり3年生以上が行うことができる仕組みになっております。実習を行うために、まず1年次で、日本語教育の学習よりは、むしろ多文化共生に関する科目を中心に勉強します。次に2年次以降から、日本語に関する科目を中心に勉強していきます。そして、3年次に実習行います。ただし、実習を行って終わりというわけではなく、実習後、もう1度、座学に戻ります。実践したことを、理論的もしくは専門的に学んでいきます。このような流れが本学の日本語教員養成課程であります。

3年次以降の実践部分では、日本中の大学で例を見ない特色のあるカリキュラムが組まれています。そのひとつが本プロジェクトであるブラジル人学校との連携事業です。それも1年間と言う長期実践（日本語実習）が設けられております。この点において他大学では見られないカリキュラムといえます。

学生が行った報告の中にある目的と違い、教員側としての目的、本学日本語教員養成課程の目的と言って良いかと思えますが、教育目的が4つあります。

一つは「PDCA」です。これがきっちりできる実習と、これができる実習生、つまり、学生を育てることを考えております。「計画書の提出（Plan）」、「実践（Do）」、「振り返り（Check）」、実践後に自分で、反省会で言われたことのチェックをし、その反省を踏まえて再度、教案を再提出します。これを次に「活用（Action）」、活かせるようにします。

2つ目は「継続的に」という点です。これが大きく、今日報告してくれた学生である戸塚真友子さんは現在4年生で、他の2人の学生が3年生です。実習が3年次と4年次の2年間で行えることで、先輩から後輩へ内容が継続されていきます。こうすることで、一つ一つが反発的な授業にならず、絶えず、「新たなもの」を創り出していく、「より良いもの」、逆に、失敗していたり、抜けていたりしていれば、「補完したもの」ができていきます。

3つ目は「異文化体験・異文化間交流」です。これは学生から発表があった通りです。これらのことを通して我々は本格的な教員へ成長させていくことを考えます。先ほどコメントしていただいた鍋田先生のような、「小学校教員であり、かつ、日本語教育もできる教員」を育てていけたらと思っています。昨日報告があつて私は大変喜んだのですが、愛知教育大学に日本語教育コースの大学院があります。また、愛知教育大学は大学院に3年行くと小学校の資格がもらえるコースが準備されています。日本語教育を専攻する大学院と小学校養成を行う大学院コース、その両方に合格したという報告を、本学日本語教員養成課程を学んでいる4年生から受けました。日本語教育もできる小学校教育という、多文化社会の実現に寄与できる本格的な教員を目指す学生が出てきたというのは、本学の日本語教員養成課程の成果の一つではないかと思っております。

最後の4つ目になりますが、4つ目は「外国での授業のシミュレーション」です。2013年3月に日本語教員養成課程で学んだ第一期の学生が初めて巣立ちました。その卒業生が現在アメリカで日本語教育に携わっています。EASとの連携事業が実り、日本国外で日本語教育を行う実践的訓練になることは我々の意図するところです。

ここで、別の話になりますが、EASとの連携事業の枠組みについて説明したいと思います。この授業は大きく分けて二つに分けられます。PowerPointのとおり、実際にEASの授業、鈴木先生の授業を見せていただくのが前半です。そして、学生たちによる授業が後半となります。この二つがひとまとまりになった授業です。学生は後半の授業のために授業準備をします。これは、先程、学生から報告があつたとおりです。一方、EASの方では、去年2012年の話ですが、日本語の授業が火・水・木・金とあるそうです。そのうち、水曜日の1時間が静岡文化芸術大学に来て行う授業となります。EASの児童・生徒にとって、水曜日が日本語を使う「実践の場」として機能しているということ、EASの鈴木先生から聞いております。EASとの連携事業で行っている日本語教育で心がけ、実践していることは、学習項目、学習目標を先生から生徒に対して一方的に教えやテキストをただ勉強するというような、一方通行の授業ではなく、児童・生徒と遊んだり会話したりという交流を主とし、楽しんでいく中で、日本語を身につけられる、そんな授業を目指しています。これは私とEASの鈴木先生とお互いに確認し合い、実践していることであります。

最後に運営上のことですが、EASとの連携事業に関しましては、毎年年度初めに、EASの児童・生徒が何人来るのか、何曜日の何時から来られるのか、本学の学生は何人参加希望者がいるのか、何人実習に参加させてあげられるのか等、私や池上先生、そして、EAS鈴木先生で調整しております。このような全体のコーディネートと、学生へのサポートが我々の仕事となります。

池上 このプロジェクトの当事者でもあるEASの日本語担当の鈴木先生です。

【コメント】

鈴木 浜州市東区天王町のEASブラジル人学校で日本語教師をしている鈴木です。皆さんあまりブラジル人学校をご存じないと思うので、簡単に説明します。300人の生徒が家具屋を改修した校舎に、幼稚園から高校生まで在籍しています。運動場も体育館もありません。スタッ

フ生徒ブラジル人で僕だけ日本人です。僕はポルトガル語がほとんど分からないので、授業は日本語を使って行っています。子ども達の日本語学習への意欲はといいますと、あまり高くありません。浜松はブラジル人のコミュニティがしっかりしていますので、日本語がなくても生活できます。日本語に触れ合う機会がほとんどないことで、子ども達が耳にする日本語、そして、日本人に対するイメージは僕以外にはないです。僕に対する日本語や僕がどうやって接するかが、彼らの日本人や日本語に対するイメージの全てだと思って彼らと接しています。静岡文化芸術大学からこのプロジェクトのお話が3年前にあって、「よし」と思いました。これで子どもたちが思いっきり体を動かせると思いました。大学には広い体育館もあるし、庭というか芝生もあるので、これでやっ子どもたちが体を動かせるなど思いました。日本語と関係ないかもしれませんが、正直うれしく思いました。

実際に大学生と授業が始まって、遊びの中で覚える日本語は子どもたちにとって日本語を覚える動機になっています。これをつかったら遊びで使える、ゲームで使えるということで、前向きに日本語を覚える姿があって感動しました。中でも1番感動したのは、僕以外の日本人の名前を覚えてそれを言い、また、僕以外の日本人から自分の名前を呼ばれるという姿を見たことです。これは大学に来た意味があったなと思いましたが、今も思っています。これからも先生、よろしくをお願いします。

池上 後半はフロアの皆様から質問やアドバイスなどをいただいて、今後の活動展開に生かそうと思いますが、まず冒頭に北脇先生から一言いただきたいと思います。おそらく、市制を預かっていた頃まい種が今芽を出して伸びている状況を目の当たりにしている、というところだと思いますのでよろしくお願いします。

【質疑応答】

北脇 今日は池上先生、学生たちのお話を聞いて大変うれしく思いました。文化芸大が、この外国人が非常に多く住んでいる浜松という土地に設立された。そして文化政策科なるものがある。ここで何をやりたいかというとき多文化共生の研究・教育を大きな柱にしているというのは、ここに学校ができたという意義を生かしているということで大変嬉しく思いました。私の感想というか、意見交換したくなるかなということで二つ申し上げます。

ひとつは学習支援に関することで、浜松の地域でも日系の皆さん、外国を知らない人たちの定住の傾向が強くなってきて、ここで生まれ育った若い人たちが増えてきています。その中から文化芸術大学に入学する生徒が出てきていることで、今まで学習支援と言うと小学校、中学校での支援、そこから高校進学への支援まで広がってきた感じですが、今の時代からするとさらに高等教育に進む若者を支援することが大事になってきていると思います。だから高校生に対する学習支援も皆さんの活動の中にあるということで、そこにはこれからも力を入れてほしいと感じました。

もうひとつは多文化社会を作るということになると言語も文化という意味でも、多様性というのが大事だと思います。皆さんの、学生の学習支援や交流支援の場合も、皆さん自身もポル

トガル語とかスペイン語などを積極的に身に付けて、あるいはタガログ語、中国語でもいいので、それで子どもたちと交流することも大事かと思います。交流支援にも、日本人の子どもたちにも、たとえばポルトガル語でブラジルの子どもと話をすることを促すとか、そういうことが大事ではないかと思います。その点は私が市長のときカナリーショ教室というバイリンガルの学習支援の授業をやったり、浜松市立高校のインターナショナルクラスとか、多文化社会の中で言語も文化も、そこにいる人が行ったり来たりするスイッチしてそれをつなぐ事が大事だと考えます。このような取り組みをしましたので、そういうことを学生さんたちの活動の中でも、大事にしてもらえたらというのを感じました。

池上 まず学生支援は、大学進学を視野に入れた高校生の支援。二つ目、多様性というところで、日本人のほうも多様な文化・言語を身につける、そういったことの必要性の話でした。今の2点について学習支援と言うことで丹羽さんにコメントをいただきたいと思います。

丹羽 高校生の支援ですが、現在、磐田のセンターでは分からないことがあったら聞いてくれますが大体自分で勉強している感じで、今受験生は文系の子で1年生の子は理系ですが、受験生の子は英語が得意なようで学年でもトップクラスです。高等学校の英語だと私たちも教科書を見ないと分からない。英語は私も苦手なので勉強しなければと思ったり、英語なら辞書を引いたり、実際に問題を一緒に解いてみたりとかは中学生みたいにはできません。高校生は質問してくることがないので、対処の仕方が難しいのですが、赤本を買っていたらそれを一緒にやってみたりとか、あと基礎的なところは教えらえるところはあると思います。中学生だけでなく高校生の学習支援も考えていかなければならないと思います。

池上 私は愛知県の多文化共生推進プランの改訂作業を携わっているのですが、その改訂に関する会議には、愛知県内の大学の先生方に入ってもらってディスカッションをしました。愛知県内でも大学生になる外国人、ブラジル人が増えています。定住が増えた中で親御さんも日本に暮らすには大学進学が必要だという認識は持っています。でも分からないことが多いのです。大学側として主体的にできることのひとつは、大学進学に関わるいろんな情報提供、進学ガイダンスのようなものでしょう。たとえば複数の大学で連携してやっていく方法もあり得るのかもしれませんが。例えば浜松の大学を中心に、静岡県西部高等教育ネットワーク、そういうネットワーク会議があって本学がその事務局をになっています。そういう既存のネットワークを介して情報提供する機会を設けるというのはありうるかなと思いました。学習支援のやり方については個々の学校に委ねるのは今のうちには難しいかもしれない。場所は高校だと多々ありますね。駅近辺でそういう教室を大学として用意するのはできるかなと思って聞いていました。私どもの高等教育、つまり大学などへの進学は重要な局面だという認識が共通していますのでそこについて少し考えていきたい。二つ目の多様性の部分、学生側も外国語を使ってということは、ポンチプロジェクトがお正月の時に「ジレイタ（右）」とか「イスケルダ（左）」とかやりましたね。あれなんかを視野に置いて、またご自身が外国人当事者の宮城さんにコメントをお願いします。

宮城 大学生が言語を身に付けて交流するのは大事だと思っていて、ポンチプロジェクトのぷちまりとかお芝居する団体が結成されて、彼女らもポルトガル語の芝居、今日もしてくれると思いますが、実際に私たちに聞いて「この発音何ていうの？通じてるの？」とか聞いてくれるので、それがすごく大事だと思っていて、今後もタガログ語とか英語で芝居する方針でぷちまりは活動していくみたいです。

池上 今日は浜松市教育委員会からも澤田先生にお越しいただいているので、コメントあるいはご質問をお願いします。

澤田 学生たちが意思を持って活動に参加されていることがひしひしと伝わってきて、今日のシンポジウムに参加してよかったと思っています。ここに関係している方たちも関わっているかもしれませんが、今小学校低学年の支援にも入っているので、学校の中で、子どもたちと触れ合う中で子どもたちが学校に生活適応していく。それから学生たちも子どもたちからパワーをもらうという形で、双方にいい効果を挙げているということも聞いています。日本の公立学校に通う子どもたちは日本の学校の中のシステムの中で生活しているので、どうしてもそこで不適応を起こす場合があります。それを今学校が理解して、その子に応じた支援・指導をしようという形で進んでいます。でもそれが親御さんに伝わらなかつたり誤解があつたりということで、先生方もあくせくしています。

ひとつとても興味深かったのが、ブラジル人学校での日本語教育ですが、大学の日本語教員の養成というか、そういった形とタイアップしながらやっているということですが、そういうカリキュラムというかその辺りをどんな形で組んでいるかを聞かせていただけると幸いです。

池上 低学年の子どもたちとの接触は、本学のプロジェクトとしてやっているわけではないのですね。『ぴよぴよクラス』というのが有名ですが、それは本学の学生たちがかなり深く関わっています。私たちは既存の支援と違う形で今どんなニーズがあるかを検証するため、この特別研究を進めています。ブラジル人学校とのコラボレーションでの日本語教育、これはどういう企画なんだ、ということですが、ひとつはっきりさせたいのは、ブラジル人学校に行つてやるわけじゃないです。火・水・木・金の内、水曜日の授業をブラジル人学校の子どもたちと鈴木先生がうちの大学に来てやっています。学生たちはこのキャンパスの中において、ブラジル人学校の日本語の授業を受けています。前半は鈴木先生の行っている授業を後ろのほうで見せてもらって、後半は学生たちが前に出て教育実習をやつて鈴木先生からコメントをもらう形です。

このご質問に対しては、日本語教員養成課程担当の教員の立場で本学の広瀬が答えます。

広瀬 澤田先生がお聞きになりたいことはE A Sとの連携事業が、どのように成り立っているか、ということによろしかったですか。

澤田 大学の方で日本語教育をこういう風にやつていこうというものと、ブラジル学校に求めるもの、その辺の兼ね合いはどうですか？

広瀬 このプロジェクトは、中身、いわゆる授業は学生が考え、教員側はフォローするということです。そして、どのように事業を成立させるかの調整は教員の仕事となります。具体的に申し上げますと、EASの鈴木先生と私とで、「来年度何人ぐらいの学生が来られるのか」とか、「日本語のレベルがどれぐらいなのか」とかを年度が始まる直前に連絡を取りあっています。それが決まると、本学の日本語教員養成課程で、今年の課題というかテーマを考えます。大きなテーマを何するか、児童・生徒が一つ一つこなしていく課題は何かなど。このようなことが見えてきますと、何曜日何時から、EASから何人の児童・生徒が来るか、そして、本学から何人の学生が参加するかを決め、本学に日本語教員養成課程運営委員会という委員会があるのですが、そこに私が報告し、了解を得ることになります。そこでの決定事項を、鈴木先生に伝えて、EASのほうからも「それでいいんじゃないか」という返事をいただき、正式に参加学生に伝えるという流れになります。1番大変なのは時間帯が上手く合うかということと、EASとしては運営する上で1番ネックというか、話がうまくまとまらない部分なのですが、運転手がいるかないか、運転手がちゃんと確保できるか、また、運転手の金銭面の話ですね。

池上 もうひとつ大学として大事なことは日本語教員養成課程を大学の正規のプログラムとして持っているということです。成果が出たら最終的に何かもらえるのか、ということですが、我々が定めた基準をクリアした学生には修了証を出します。教員免状のような国が定めたものでないのですが、本学が定めた基準をクリアした学生には修了証を出すのです。たとえばそれが日本語教師としての就職活動の際に、ある一定の内容を修めたものとして成果、証明書のような位置づけになっている、という形であります。

もう一人、ご指名で磐田市役所から来ておられる鈴木さんにお話を伺います。

鈴木 磐田市市民活動推進課の鈴木です。最初に、池上先生を初め、多文化交流センターに、勉強を教えにきていただいている学生のみなさんにお礼を申し上げます。ありがとうございます。磐田市では多文化共生の事業を進めてますが、防災と教育が1番の課題です。中でも教育部分については交流センターでの学習支援が成果を挙げていると思っていますが、ただ少し外国の中学生の参加が少ない気がします。行政として保護者にただ通知を配って参加してくださいという硬いやり方をしていますが、それ以外で中学生にたくさん参加していただく、学生さんの柔らかい頭でのアイデアがあれば教えていただきたいなと思いますのでお願いします。

池上 磐田市は今年度から予算を付けてくださって、私共の学生は磐田駅で降りてそこからセンターまでタクシーを拾います。往復のタクシーチケットも負担してくださっています。この場を借りてお礼を言います。

さて丹羽さんへの質問となるのですが、せっかく素敵な支援があるけれど、その中学生や保護者へのアプローチが硬い。どうしたら柔らかくアピールして子どもたちが来てくれるんだろうか、何かアイデアはありますか、ということです。

丹羽 チラシとかだと形式的なので、回覧板でまわすのと同じ結果になると思うので、私たちが夏や冬にやっているイベントに参加してくれている生徒の友達で参加していない子がいて、勉強できないよと言う子がいたら「イベントだけでも来てくれる？」とか。あとは友達同士で誘い合うということぐらいしか思いつかないのですが、すみません。

池上 チラシはちょっとポップなものとか、柔らかいものを作ってくれとあり得るかもしれないですね。他にフロアからこれを聞いておきたいということがあったらお願いします。

質問者の男性 質問を2点。毎年この大学の多文化共生にかかわる取り組みについては楽しみにしています。毎年発展、かなり頑張っていると思うのですが、今日は参加者が少ないかなと思います。その辺の中心にいるメンバーと周りのバックアップする人たちの広がりがある今この場面では見えないのかなと思います。もう少し今日はたくさん人が来ているのかなと思っていたのですが、男子学生の影が薄いような気がする、全体数そのものが少ないのかもしれませんが、それについてコメントいただけたらと。

もうひとつは、大学に進学したい子たちへの支援は学生だけでなく多くの社会人もしています。そこにかかわる社会人は学び直しと言うかいろんなことを専門的に学び、専門的な何かで学び直しのニーズは持っていると思いますが、この大学は社会人聴講生制度を採用していて、私もちょっと使わせてもらいましたが、日本語教員養成課程の専門的な科目というかそれが社会人には開かれてないと思います。それを開くのが難しい面があるかどうか教えていただければと思います。

池上 二つ目から行きます。私は日本語教員養成課程の運営委員会の委員長を務めています。社会人聴講生の方々に日本語教員養成課程の中核的な科目が開かれていないのは事実です。それは本学が主として在学する学生たちに向けて質の高い日本語教員養成の教育を提供したいということを目指しているからです。在学の学生であっても日本語教員にかかわる中核的な科目については、それまで日本語教員課程の科目を取ってないと履修を認めないという極めて高いハードルを設置しています。単独の科目だけ取りたい社会人もいらっしゃると思いますが、それについては本学では現時点で門戸を開いていません。これはまだ検討していませんが、社会人聴講という聴講生と違いまして、科目等履修生と違って単位を取っていく制度があります。利用者はほとんどいませんが、場合によって科目等履修生でしっかりやって試験もレポートもやってという方なら、必要な科目を積み重ねればその可能性は開けるかもしれません。それはまだ大学として検討していませんのでまた機会を設けたいです。

二つ目の質問の答えは、在学する学生の中でも地域と段階を踏んで学んできた学生に対して開放している。そしてそれは本学が一定の質をクリアした日本語教員養成課程の修了者を社会に輩出したいという強い意志の現れです。

最初の質問、中心メンバーと周りのメンバーとの間に温度差があるのではないかと、男子学生の影が見えないということについて新村さん、お願いします。

新村 中心メンバーと他のメンバーとの温度差ですが、私たちは週1回全体のミーティングを開いていて顔を合わせることを大事にしています。1年生から4年生までいるので横のつながりだけでなく、縦のつながりを持てるようにと考えています。最初の1年目はワークショップにも男子学生はいませんでした。が、昨年1人、今年2人、男子学生もいるので、小学生からしても男の子は男子学生の方が仲良くなりやすいこともあり、男子学生を集めたい気持ちもあって、国際文化学科は男子が少ないので他学科にも募集してみたいです。

池上 磐田プロジェクトにも男子学生は関わっているので丹羽さん、どうぞ。

丹羽 今磐田プロジェクトには男子学生が4人います。1年生3人の内、2人は男子で、2年生に1人と3年生に1人の計4人です。一緒に行くと男子学生の方が男子生徒はかかわりやすいみたいで、私が一緒に行くときも男子中学生の子達が男子学生に話しかけている気がするし、イベントとかでも普通に話はするのですが、女子学生よりも、一緒にレクリエーションをするときは男の子同士のほうが盛り上がるかなと思います。

池上 日本語教員養成課程のチームでも男の子はいます。

鈴木 昨年度私が担当したときは男子学生がいなかったのが女子学生だけで事業を行っていましたが、男子生徒に話しかけようとしてもシャイでなかなか話してくれなかったのが男子学生の方がいいと思いました。

広瀬 今年度は8人中2人が男子学生で、EASの実習のときは男子生徒さんが3人いるので男の子がいると元気に楽しそうに話しかけてくれます。全体数が少ないのもありますが男の子にも積極的に関わってもらえるようになればと思います。

池上 いま壇上にいるこの学生たちは全員国際文化学科の学生で、この学科は定員100名で120名くらいいますが8割が女子学生です。ただし、ひとつ大きな変化があります。公立大学になった辺り（2~3年前）から男子学生が活動するようになりました。それまでは男子はいってもあまりアクティブな活動、学内、外、海外の活動はほとんどかかわっていなかった。公立大学になって男子が海外のボランティアプロジェクトにかかわるようになったり、国内や市内の多文化共生関係のプロジェクトにかかわるようになった傾向があります。私はうれしいこととして歓迎します。今日は土曜日で学生はアルバイトしたりということがあるので、平日ならもう少し来てくれたのだろうな。今日も何人か来てくれてはいるのです。

もっとご意見いただきたいところですが、最後に簡単にまとめます。

私ども大学は重点目標研究領域ということでユニバーサルデザイン・パートマネジメント・多文化共生の3つの柱を謳っています。ここ1~2年、特に地域との連携、地域への貢献ということを経営の使命として強く意識するようになりました。本学のように都心部にあって、学生たちが対外的な活動にも熱心な大学ですから、こういう言わばリソース（資源）をもっと全面的に生かしてそれを有機的につなげて本学の実行面に生かしていこうという大きな流れの

中にあります。しかし現状の問題として、それぞれのプロジェクトが学科ごとの縦割りになっているのも事実です。たとえば今回紹介したプロジェクトのほとんど全てが国際文化学科の学生が参加する活動となっています。もっと全学的に呼びかけるチャンネルを作っていけば、他の学科・学部の学生たちも関心を持つと思います。逆にデザイン系のプロジェクトも国際文化学科の学生が関わることで面白く変化することがあると思います。残念ながら本学はまだそれができていません。私たちの側も問題ですけれども、学内にある多様な活動をもっと本学内の多様な人材が関わるように、リクルーティングの仕組みなどを変えていきたいというのが1点あります。

もうひとつは継続性の問題です。学生たちの活動の場合、一人の学生がアクティブに動ける時期は1年半から長くても2年です。就職活動が始まるなどにより、3年生の後半はもう動けなくなってしまいます。そこで、縦のつながりを確保するための仕組みづくりも、私たちの大学に求められているのではないかと思います。幸い今日発表したいずれのプロジェクトも次の世代が今育ちつつあるので、この芽をきちんと伝えていきたいと思います。

今日ここに宮城さんが座っていますが、本学にはこの国で育った、外国にルーツを持つ学生たちが何人も入っています。こういう学生たちが日本人の学生にとって刺激となり、そういう学生たちの活躍を社会が見てくれることで、この国で育った、外国につながる子どもたちに対する意識が変わるだろうと思います。私たちの大学を出るまでがんばってもらってもその先、就職活動や社会の重要な節目で困難が待っているようでは、私たちの大学が何のために多文化共生のミッションをやってきたか分からない。大学外での活動がより広く社会の皆さんの目に触れるよう私どもも尽力していきたいと思います。大学の予算があって初めてできることですが、予算はそんなに大きな金額でないものですから、お金がなくなったから終わりではなく、息長く続けていけたらと思います。

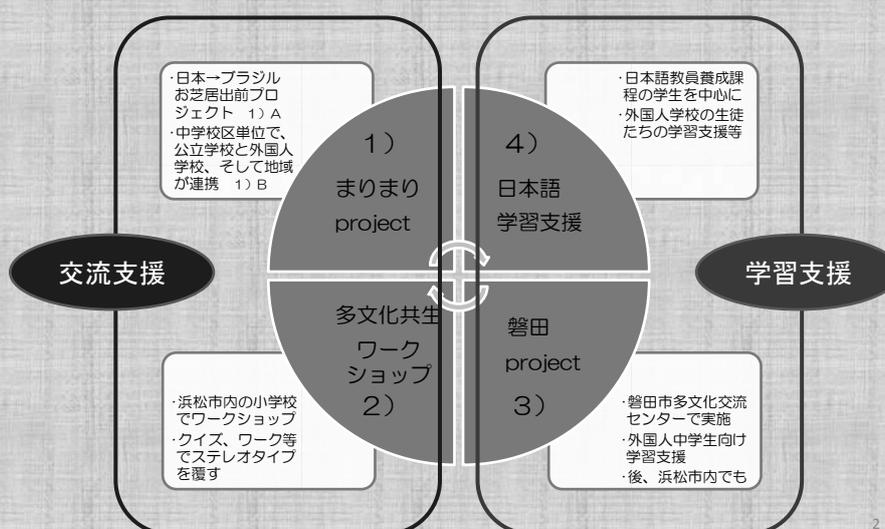
本日はご参会くださり、まことにありがとうございました。

趣旨説明

- 静岡文化芸術大学では多文化共生の研究を継続
 - 各種報告書、シンポジウム等で地域へ還元
- 2011、12年度の文化・芸術研究センター長特別研究
 - 「多文化共生社会の実現に向けた交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究」(研究代表:池上重弘)
- 本学の独自性を活かし学生関与の実践活動を展開
 - 実践活動を通して交流支援と学習支援のあり方を探る
 - その成果を検証し、大学主導の支援活動のモデル事業として全国に発信
 - 2013年度にシンポジウム(本日)、報告書(年度内)

1

プロジェクト全体のイメージ図



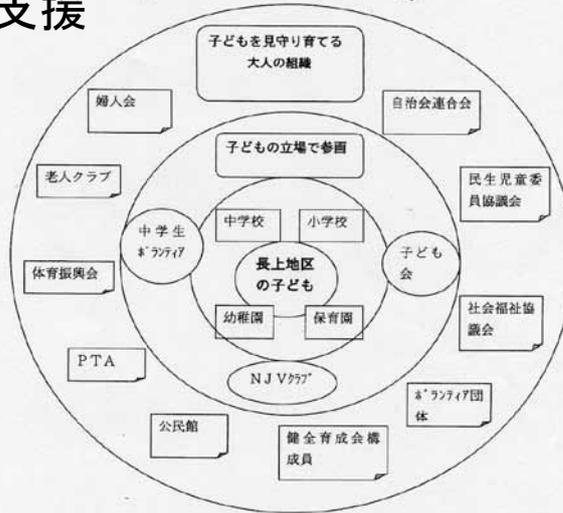
2

浜松での交流支援

与進中学校区で、
外国人学校も含めた地域のつながりを作りたい

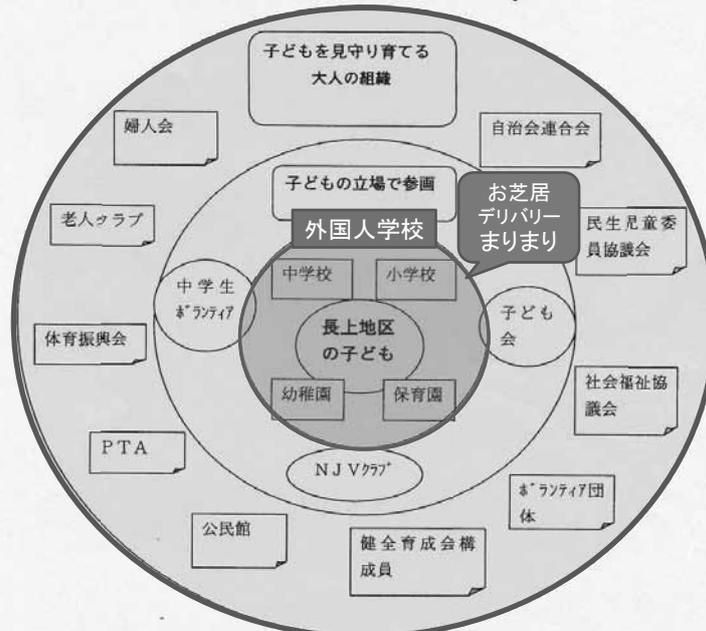
「お芝居」を介して、
つながりを作り出せないか？

長上ふれあい共和国



3

長上ふれあい共和国



4

2013.10.12

文化をつなぐ橋づくり ―学生による実践の試み―

1) まりまりのお芝居を介した交流支援

A 日本・ブラジルお芝居出前プロジェクト

(プロジェクト監修者 池上重弘)

1 プロジェクトの概略

お芝居デリバリーまりまりとのコラボにより、多文化共生の交流支援を行う。

(1) 浜松での交流支援

中学校区の公立中学校と外国人学校をつなぐ。

公立学校、外国人学校、公民館をつなぐ。

(2) 日本とブラジルの交流支援

まりまりのお芝居を観た日伯両国の人たちがメッセージを交換。

2013年度に静岡文化芸術大学で寄せ書き展示会。

(3) ブラジルでの交流支援

サンパウロ州内の町で日本語学校と公立学校をつなぐ。

ブラジル日系人社会の高齢者と子どもたちをつなぐ。

2 お芝居デリバリーまりまりとは

2005年設立の俳優・音楽家・舞踏家の集団。

普段は劇場に来ることができない、あるいは来ない層に向けお芝居上演、8人のメンバーがその時々趣旨に沿って集う(福祉施設、学校、お祭り等)。

昔話メドレー(短い演目を複数上演)。

一見すると喜劇風、声帯模写月パントマイムのようにも見えるが、

昔話に独特の解釈を加え、文化の壁を越え普遍的にアピール。

身体と声だけで豊かな表現、観客との近さ、インタラクションに特色。

海外公演の経験も豊富(イギリス、ドイツ、フランス、メキシコ等)。

3 プロジェクトの経緯

2010年度

路上演劇祭 Japan in 浜松 2010 にまりまりが出演、池上と出会う。

路上演劇祭シンポジウムでもまりまりが登壇、デモンストレーション。

トライアルとして「多文化共生・実験教室」。

まりまりのお芝居が持つ「つなぐ力」を多文化共生にどう活かすか？

2011年度

日伯交流協会の理事会（5月）、例会（6月）でまりまり上演。
静岡文化芸術大学で学生向けワークショップとお芝居会（6月）。
ブラジルでのプレ公演（8月～9月の約2週間）。
浜松市内の長上地区での活動も開始（与進中学校、EAS、公民館）。

2012年度

浜松市内の長上地区での活動が本格展開、本学学生も参画。
ブラジル本公演（8月～9月の約4週間）
ニッケイ新聞の全面的サポートを受け、多くの寄せ書きを持ち帰る
公演回数 38回（公演29回、WS6回、デモンストレーション3回）
総観客数 2,650人（観客数+ワークショップ参加者数）
A群 日系人のいる場所（学校、施設、県人会等）
B群 ブラジル人のいる場所（学校、施設、幼稚園等）
C群 日系人とブラジル人の交わる場所（広場、イベント等）

4 成果

2011年度のブラジルでのプレ公演以降、主として浜松市内での公演の折に、プロジェクト趣旨を説明し観客から寄せ書きを書いてもらった。
2012年度の本公演では日本で書かれた7箇所分の寄せ書きを持参、展示
ブラジルでの公演時に「まりまりのお芝居を観た者どうしのメッセージが地球の反対側に届けられる」と趣旨説明し、15枚の寄せ書きを得た。

ブラジルの人々にとって・・・

劇場に足を運ぶことのない一般的な市民や子どもが日本文化を知る機会。

日本の人々にとって・・・

ブラジルからの寄せ書きを読むことにより、ブラジルや日系人コミュニティに対する日本人市民の理解が深まる機会。

5 課題と展望

寄せ書きのコメントの多くがまりまりのお芝居に対する評価に終始。
相手国の人々に向けたメッセージは少数。
ブラジル公演には多額の費用が必要、今後の継続は困難。
2年間のプロジェクトの成果を何らかの形で出版し公表したい。

2013.10.12

文化をつなぐ橋づくり ―学生による実践の試み―
Ponte Project (ポンチプロジェクト) 国際文化学科2年 宮城ユキミ

1 プロジェクトの概要

Ponte とは？

Ponte (ポンチ) はポルトガルで「橋」の意味
日本とブラジルに限らず、「架け橋になる」ことを目標

目的

- ・お芝居デリバリーましまりのブラジルツアーで集まった寄せ書き、写真、絵を日本に伝える
- ・お芝居を通して、長上地区の与進中学校とEASブラジル人学校の交流を「お手伝い役」として学生が支援

2 活動内容・成果発表

「つなげる、広がる、世界が変わる」をコンセプトに！

2012.7.28 浜松市多文化共生センターで初展示

→ましまりが運んでくれた寄せ書き、ポンチプロジェクトの紹介

2012.7.31 浜松市立与進中学校で、EASブラジル人学校、ましまり、SUACでワークショップを通して交流

→アイスブレイクとして、冒頭にましまりがお芝居をポルトガル語で披露

「自分の名前を紹介し、ポーズを決める！」言葉のいらぬワークショップで交流

2012.11.10 長上公民館まつり リハーサル

→ましまりと共に、オープニング、エンディングの部分で、与進中、EAS、SUACが舞台に立つことに

EASブラジル人学校で、リハーサルの練習

2012. 11. 11 長上公民館まつり

→当日のリハーサルから注目された

地域の方々に、多文化、ブラジル人学校、コミュニティをアピールする場となった

2013. 1. 19 こども講座 ポンチワークショップ実施

→「お正月」がテーマのワークショップで、ブラジルの Rabo de Burro という遊びを紹介
子どもたちに、「異文化」を身近に感じてもらう

まりまりが、浜松に來れなくなってしまう、自分たちでお芝居を！

→与進中学校国際交流部が多言語お芝居に挑戦

→「大学生も」という声掛けから、まりまりのスタイルを取り入れた「ぷちまり」が結成

本格的にお芝居の稽古が開始

→国際交流部の活動も活性化

・「ぷちまり」結成にあたり、財団法人はましん地域振興財団、公益財団法人浜松国際交流協会から助成金をいただきました

3 課題

- ・ある地域に特化してしまった
- ・「お芝居」の限界
- ・「学校」という教育機関との連携・協働の難しさ
- ・お芝居の稽古も含めて学生のみで実行

10月11日(金)～10月20日(日) 11:00～19:00
SUAC 西ギャラリーで展示開催中！

「届け！お芝居デリバリーと私たちの想い
～Expand your Vision, Find a new World～」

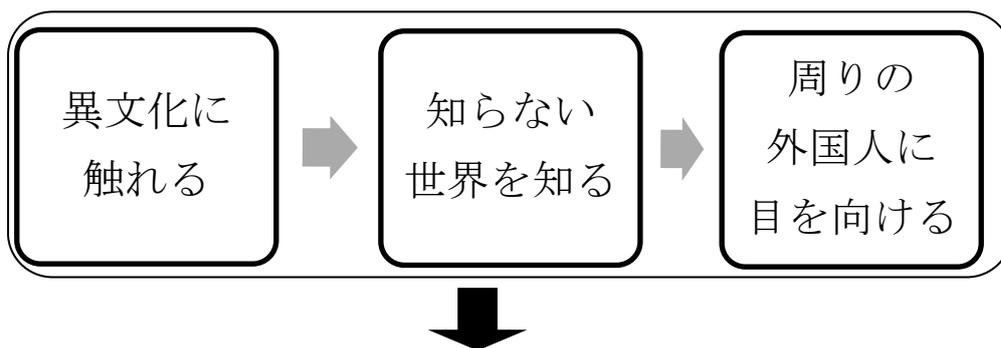
場所：静岡文化芸術大学 西ギャラリー
入場無料、事前申込不要

多文化共生ワークショップ

2013 年度代表 新村 奏代

○ 活動目的

- ・ 世界には様々な文化があることに気づき、異文化理解をしてもらう
- ・ 子どもたちの興味を広げる
- ・ 自文化を見直すきっかけをつくる



普段から多文化共生について考えてもらいたい

○ できた経緯

2011 年度の 4 年生のアイデアからはじまったプロジェクト
毎年、有志学生にバトンがつながり、2013 年度は 3 年目

○ 活動内容

- ・ 週 1 回のミーティングで情報共有
- ・ 校内ワークショップの実施
〔ワークショップ・ファシリテーターについての勉強を兼ねながら、
まずはワークショップを体験する〕
- ・ 小グループを作り、その班でワークの案を考える
- ・ ワークのリハーサル、最終確認
- ・ 小学校でワークショップ本番
(例年、市内の 2 校でそれぞれ 2 時限分ずつ実施)
- ・ ワークの振り返り、次のワークショップへの課題探し

(今年度も上記の流れで進めていく予定)

○ 昨年度ワーク内容 テーマ：「音楽」から異文化を体感する

〈世界の歌〉

- ・誰もが耳にしたことのある音楽の発祥が、日本なのか海外なのか当てるクイズ
【日本の童謡から日本の童謡にゆかりのある国について知り、世界に目を向ける】
⇒ 海外が発祥の曲は、原曲や、日本以外の国でも歌われていることなどを紹介

〈世界の国歌〉

- ・世界の国歌をいくつか聞いてもらい、どこの国のものかを予想するクイズ
【今まで知らなかった各国のイメージに気づく】
⇒ 各国歌の歌詞の意味も説明

〈世界の踊り〉

- ・海外の踊りの映像を見てもらい、どこの地域の踊りかを予想するクイズ
【地域ごとの踊りの違いを見つけ、世界の民族のもつ音楽の世界観を知る】
⇒ その踊りにどのような歴史や意味があるかも説明

すべてのワークにおいて、自文化を見直してもらうために日本についても取り上げた

○ 活動成果

- ・楽しかった、面白かったという感想をたくさんもらえた
- ・子どもたちが持っていた“ステレオタイプ”をいい意味で覆すことができた
- ・子どもたちだけでなく学生も学ぶことが多かった
- ・大学生が教える側の立場から学校現場を見る良い機会となった
- ・小学校側から今年度も実施してほしいと声をかけていただけようになった

○ 今後の課題

- ・「楽しかった」で終わらず、この先につなげるためにはどうしたらよいか
- ・先生のを借りずにワークをスムーズに進行させたい
- ・参加学生の規模拡大

2013.10.12

文化をつなぐ橋づくり ―学生による実践の試み―

磐田プロジェクト (国際文化学科 2年丹羽葵)

1 プロジェクトの概要

「多文化共生社会の実現に向けた交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究」の一貫

2 活動内容

浜松・・・月曜 15時～16時

浜松市立南部中学校

磐田・・・水曜、金曜 19時～20時

磐田市多文化交流センター

- ・主に外国にルーツを持った児童対象
- ・1対1のつきそい方指導

3 主な年間スケジュール

春・・・新メンバー勧誘

夏・・・小学生支援(磐田市からの呼びかけ)

サマーイベント

レクリエーションで生徒と学生が交流

冬・・・クリスマス会

進路、学習相談

センター、磐田市、大学生との意見交換

4 学生の参加状況

1年生・・・3人

2年生・・・4人

3年生・・・1人

4年生・・・1人 計8人

5 現在の磐田、浜松の様子

磐田・・・中学生、高校生計 20 人程度

高校受験生は別室でセンターの方が指導

センターの方・・・退職された先生方は受験生指導

他は中学 1～2 年生指導

学生・・・主に高校生、中学生指導

科目は国英数理社の全科目

浜松・・・中学生 3～4 人

各自問題集持参、学生が問題集を用意することも

6 各種イベント

(スライドで写真を紹介)

7 成果と課題

○成果

- ▼高校進学への支援
- ▼浜松市、磐田市の生徒間での交流
- ▼大学生が身近なモデルとなる
- ▼地域、大学、行政との連携

○課題

- ▼大学進学への支援
- ▼個人へ焦点をあてた支援
- ▼学習へ集中できない生徒への指導

○課題への対策

- ▼学習だけでなく大学の情報を提供
- ▼学生間で生徒の情報を共有
- ▼気になった生徒には学生が側につく

ブラジル人学校と連携した日本語学習支援

静岡文化芸術大学責任者 広瀬英史

EAS 責任者 鈴木規之

報告学生 戸塚真友子（4年）

桑野紘子（3年）

諏訪かおり（3年）

1 概要

- (1) 静岡文化芸術大学日本語教員養成課程の実習科目（選択制）
静岡文化芸術大学日本語教員養成課程は2009年4月から開設された
実習は3年次以上が行う
多文化共生に関する科目を中心にした座学→日本語教育の実践
- (2) ブラジル人学校とのコラボレーション
日本中の大学で例を見ない、特色あるカリキュラム
週一回、ブラジル人学校の日本語教師と生徒が本学を訪れる
- (3) 学生による講義づくり ←本プロジェクト
児童生徒を対象とした日本語教室づくり
異文化体験、異文化間交流

2 目的（プロジェクト部分に関する目的）

- (1) P D C A
Plan（計画）Do（実行、授業）Check（評価）Action（改善）というサイクルを通し、学生の成長をめざす
- (2) 継続
単発的なイベントではなく、継続的な活動を通して、経験や知識が受け継がれていくことを目指す
- (3) 異文化体験・異文化間交流
日本で経験した外国語授業以外の形を学び、実践する
遊びながら、生活しながら、楽しみながら、日本語の習得を目指す
＝“テキストを学ぶ”ではない形
- (4) 外国での授業のシミュレーション

3 形式

90分の講義時間を半分に分ける

前半：ブラジル人学校で行われている実際の日本語教室

EAS 鈴木規之先生による日本語教室の授業見学と授業サポート

後半：本学の学生による日本語教室

4 プロジェクトの経緯

2011年度～2012年度

- ・年 20 回以上の授業実施
- ・中学生対象、日本語レベル N2～N4
- ・2011 年度は試行錯誤し、現在の形を作ってきた
- ・2012 年度から綿密な計画のもと、本格始動
- ・2012 年度は「日本文化を学ぶ」というテーマで行った
また、学習項目として、漢字、発表、ディスカッションの力をつけることを目指した

2013 年度

- ・年 20 回の授業を実施予定
- ・小学生中学年対象、日本語レベル N4～N5
- ・2013 年度は「日本語をたのしむ」というテーマで行っている
また、学習項目として、表現する力と動詞を使いこなす力をつけることを目指している

5 プロジェクトの成果

- ・日本人にとっても、ブラジル人学校の児童生徒にとっても、長い期間を通して日本人に触れることができたのは良い機会となっている
- ・単なる交流にとどまらず、継続的な交流を通して、お互いの考え方の違いを語り合うことができた点は大きな成果といえる（2012 年度実践）
- ・初年度（2011 年度）では、「大学に行きたくない」と言う EAS の生徒が出たが、その後の修正により、「大学生と会うのが楽しみ」「明日も大学に行けるの」という声が聞かれるようにまでなった
- ・大学生との授業（水曜日）に向けて、EAS での日本語学習のモチベーションが高まった
- ・実習をする学生たちが、段階的な学習を意識し、授業案を立てられるようになってきた

6 今後の課題

- ・EAS の生徒数の増減により授業の成立が左右されてしまう
- ・前期と後期の長期の間（夏休み）により、進度が後退してしまう
- ・異文化体験・異文化交流の点では大きな効果が見られるが、ブラジル人学校の児童生徒の日本語力の成果に関しては、学生に伝わりにくい

写真01 趣旨説明(池上重弘)



写真02 会場風景



写真03 趣旨説明を聞く参加者



写真04 プロジェクトのイメージ図



写真05 お芝居デリバリー
まりまりの説明



写真06 “伝書鳩”としてのまりまり



写真07 コメント(深沢正雪氏)



写真08 コメントを聞く参加者



写真09 ポンチプロジェクト
(宮城ユキミ)



写真10 多文化共生ワークショップ
(新村奏代)



写真11 コメント
(南の星小、村松先生と鍋田先生)



写真12 中学生学習支援
(丹羽葵)



写真13 コメント
(多文化交流センター 木ノ内惇子氏)



写真14 日本語学習支援
(戸塚真友子)



写真15 日本語学習支援
(桑野紘子)



写真16 日本語学習支援
(諏訪かおり)



写真17 日本語学習支援
(広瀬英史)



写真18 コメント(鈴木規之氏)



写真19 質疑応答



写真20 質疑応答



写真21 質疑応答



写真22 質疑応答



写真23 質問(浜松市教委 澤田先生)



写真24 会場の様子



写真25 質疑応答



写真26 質問への回答(広瀬英史)



写真27 質問への回答(池上重弘)



写真28 質問(磐田市役所 鈴木氏)



写真29 質問への回答(新村奏代)



写真30 まとめ(池上重弘)



参加無料
事前申込不要

シンポジウム

文化をつなぐ橋づくり —学生による実践の試み—

2013年10月12日(土) 9:30~12:00

静岡文化芸術大学 南278大講義室

対象:多文化共生に関心のある市民(参加可能人数200名)

静岡文化芸術大学の文化・芸術センター長特別研究として実施した「多文化共生社会の実現に向けた交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究」(2011年度~2012年度)の研究成果を総括するシンポジウムです。交流支援と学習支援の直接的な担い手となった学生たちや指導教員が活動の成果を報告し、本学以外の関係者から評価コメントを受け、今後の地域貢献活動のあり方を展望します。

第一部 プロジェクトの成果発表と関係者コメント

趣旨説明 池上重弘(静岡文化芸術大学 文化政策学部 教授)

1) まりまりのお芝居を介した交流支援

A 日本・ブラジルお芝居出前プロジェクト

<成果発表> プロジェクト監修者 池上重弘

<コメント> ニッケイ新聞 編集長 深沢正雪氏

B ポンチ・プロジェクト

<成果発表> ポンチ・プロジェクト 代表 宮城ユキミ(国際文化学科2年)

<コメント> 浜松市長上協働センター 所長 山本茂之氏

2) 子どもたちへの異文化理解を目的とした交流支援

<成果発表> 多文化共生ワークショップ 代表 新村奏代(国際文化学科2年)

<コメント> 浜松市立南の星小学校 教諭 鍋田弘美氏

3) 多文化交流センターでの外国人中学生学習支援

<成果発表> 鎗田プロジェクト 代表 丹羽葵(国際文化学科2年)

<コメント> 鎗田市多文化交流センター センター長 木ノ内惇子氏

4) ブラジル人学校と連携した日本語学習支援

<成果発表> 日本語教員養成課程履修学生

戸塚真友子(国際文化学科4年)、諏訪かおり(同3年)、桑野祐子(同3年)

十広瀬英史(静岡文化芸術大学 文化政策学部 准教授)

<コメント> EAS 日本語教育担当 鈴木規之氏

休憩

第二部 ディスカッション

1) 質問紙への回答

2) 自由討論

3) まとめと総括

お問い合わせ

静岡文化芸術大学 〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号

Tel. 053-457-6111 (代) Fax. 053-457-6123 (代表)

文化政策学部 国際文化学科 池上研究室

Tel. 053-457-6156 E-mail: ikegami@suac.ac.jp

届け! お芝居デリバリーと私たちの想い
~ Expand your Vision, Find a new World ~

日本・ブラジル両国で実施したお芝居出前プロジェクトの来場者が書いてくれた寄せ書きを本学西ギャラリーで展示します!

シンポジウム当日は、ギャラリートーク及びギャラリー前ホワイエでのお芝居会を予定しています。

SUAC



本シンポジウムは、2013年度静岡文化芸術大学イベント・シンポジウム開催費「お芝居出前プロジェクト寄せ書き展示」及び「はままつ多文化共生 MONTH事業」の一部です。

主催/静岡文化芸術大学

後援/浜松市、浜松市教育委員会、静岡県、在浜松ブラジル総領事館、公益財団法人浜松国際交流協会(HICE)

SUAC 多文化プロジェクト シンポジウム
文化をつなぐ橋づくりー学生による実践の試みー
報告書

2014年2月 印刷発行

編集 池上重弘

発行 静岡文化芸術大学

430-8533 浜松市中区中央2丁目1-1
TEL (053)457-6156
FAX (053)457-6156
E-mail: ikegami@suac.ac.jp

印刷 オオゼキ写真印刷株式会社
433-8111 浜松市中区葵西2丁目5-20
TEL (053)436-1956
FAX (053)437-6095
